



# 拡散の影

草戸 棲家

表紙画像はDIGクリエイティブアワード2012出展時にAIさんより許可いただきました。

車一台が入れるだけの小さなガレージに一台の救急車が停まっている。ガレージの中は天井の蛍光灯の光だけで、全体的に薄暗い。それでも、古い作りというわけではなく、コンクリートの壁にはヒビ一つ入っていない。ただ単に簡素なだけなのだ。

シャッターは閉じられているが、バン型の救急車は、不自然にも消防署のガレージに停まっているイメージと違って、シャッターに後部ハッチを向けている。そのことが、出勤に備えるというよりは、慌てて戻ってきてそのまま停車したかのような印象を与えている。しかし、この場所は明らかに病院の救急搬入口ではない。車体の両側面には「楠賀谷記念病院」の文字が黒で記され、後部ハッチから見て右側面に、青色でアスクレピオスの杖を基調にした蛇のマーク、スターオブライフが描かれている。

後部ハッチと左側面の窓は、スモークとカーテンに遮られて中の様子は分からない。右側面の窓は、白い鉄板で頑丈に覆われている。フロントガラスと、運転席と助手席のドアのガラスは暗く、このガレージの照明では中の様子はほとんど分からない。

つまり、車内は密閉空間であり、何が行なわれていようと警察に呼び止められることのない、理想の逃走車両なのだ。それが今、ガレージという強固な外壁を与えられ、シャッターは閉じられている。病院の他の車両とは別にガレージを与えられた救急車のためだけの空間だ。車内で何が行なわれようとも、外へと物音が届くことはないであろう。

不意に、側面の窓のカーテンが端からめくれ上がった。続いて、ガタンと一度、車体が震えた。車体の後部の方が前部よりも大きく揺れ、右後輪のタイヤハウスで、車輪と車体の間の距離が一瞬近くなったかと思ったら、再び広がり、揺り戻しを伴って徐々に落ち着いていった。

車内から漏れる女の声。

「...ミト...あたら...日本人を...」

次の瞬間、バコッという、何が折れたような物音に続いて、何か重いものが救急車の床を跳ねまわる音が連続して聞こえ、そして最後に、今迄とは比べ物にならない物音が耳を劈いた。

「バコガシャーンヒューっ」

前輪を軸にして後輪が一瞬浮き上がり、後輪が地面に戻るまでのその刹那に、救急車のフロントガラスと、ガレージの壁との間にある五十センチほどの空間に、突然現れたその物体は、フロントガラス一面に、蜘蛛の巣状の亀裂の連鎖を、一瞬にして広げていった。運転席と助手席で、全く同時に膨張を開始した二つのエアバッグが、その光景にオレンジの色を添える。スローモーションで流れる時間の中で、連鎖の中央にある黒色の物体は、直径十センチの穴を作りながら、コンクリートの壁に深々と吸い込まれた。

コンクリート壁の内部より猛烈な勢いで煙が舞い上がり、ボンネットの塗装に当たってパラパラと

地面に落ちる。浮き上がっていた後輪が地面に戻って車重で圧縮される頃には、円筒形の物体の慣性エネルギーは、コンクリートブロックが砕け散ることでおおかた吸収された。壁から七十センチほど突き出した物体の先端から、何かが激しく噴射され続けている。その勢いで、黒い円筒は、埋まった位置を軸にして、円錐を描いて運動を始めた。車内に残っている部分が回転することで、フロントガラス全面が粉々に吹き飛んだ。

最終的に、車体の揺り戻しでサスペンションが何往復か伸縮して徐々に落ち着く頃には、そのボンベは、レギュレータの失われた最後部を重みによって斜め下向きにしながら、三十センチほどの深さでコンクリート壁に突き刺さった状態で動きを止め、後は、ただシューっと放出され続ける酸素の音だけが、ガレージの中に響き続けた。

遠くからガヤガヤとした声が聞こえて来たと思うと、だんだんに高い声が混ざっているのに気が付いた。何人かがドアから入って来たようで、部屋の中が急に騒がしくなる。四時間目の体育が終わった女子達が運動場から一斉に戻って来たのだ。ここは更衣室、今は初夏である。

一気に部屋の温度が上がったように感じられ、途切れることのないおしゃべりと、女子達の甘酸っぱい汗の臭いで部屋はいっぱいになる。体育館から素早く戻って着替え、窓の外でこのときを待ち構えていたアツシ達二人は、緊張と興奮のあまり、身動き一つできなくなった。さっきまでの虚勢が嘘のようだった。何しろ、二人共、こんなことをするのは初めてなのだ。勢いでタンカを切ってしまったとは言え、後悔していた。

いっしょにいるのは、挑発した相手、マサオである。ふざけた一言にアツシが猛烈に反発したことに驚いて、彼の側も引っ込みがつかなくなったのだ。彼の顔もアツシと同様に、興奮のため血色はいいのだが、今にも発見されないかという恐れのためひきつっている。

「古文のスズキのヤツさ、今日の掃除の時間、私のことじーっと見てたのよ、だからさ、モップ落としたフリして前かがみになって、足のモモ見せてやって、いきなり振り向いたら挙動不審になっちゃってサ、もうオモシロくて……」

息を殺して、着替えなんて見えなくていいから、このまま見つからないようにと願いながら、背中を丸くしていたアツシ達だが、聞こえてしまう女子達のおしゃべりの声、女子達が足を上げたり下ろしたりして着替える物音、そして、コロンと汗の臭いが高い体温によって入り交じって対流に乗って窓の外へと漏れだしてくる、えもいわれぬ芳香に、彼らの男の部分が反応しそうになっていた。

しゃがんでいるアツシの目線は、出窓よりも低いのが、暑さの為に全開にされた窓から、更衣室の天井が目に入った。この周囲は、木が植えられていて、外から見えにくくなっているために、特にブラインドで隠すということはされていない。エアコンを取り付けた方がいいに決まっているのだが、覗きを気にして窓を開けたくないからエアコンが必要というのは、何となく職員会議では持ちだしにくい話らしかった。そんな想像をすること自体、フトドキであるという反論があるとは思えないが、話を持ち出す側では余計な心配をして、未だに強くは主張できないでいるらしい。そのトバッチリを受けている女子達は、人数が多いときには、窓は遠慮無く全開にする代わりに、一斉に着替えて、団体で行動するという習性を獲得していた。その意味するところは…見つかったら、文字通り袋叩きなのだ。

「ほんと、アッチーな、ここ、エアコンつけれネエのかな」

「つけたって、今じゃ着替えるのに一瞬だからね。冷やしている時間ないよ。ルーバーの方がいいんじゃない？」

「ルーパーって、何？ エアコンはビーバーとかじゃなかったけ？」

「キャハハ」

「鎧戸《よろいど》っぽいヤツよ。風は通るけど、目線は遮るってヤツ」

「おおー。それ、いいね。なんで今まで付けんかったのよ」

アツシは、何だか女子達の話が嫌な方向に向かって来ると思いながらも、話題に合わせてわずかつ声が窓へと近づいて来ようと感じてドキドキした。

「窓の大きさに合わせて切らないといけない部品が多いからね。タブン、そんな理由」

「でも工事に入られるのはヤダよね。キモい連中がウロウロする上に、下手すると工事中教室で着替えとかってサイアク...」

「外につけんのよ。別んどこで作っちゃえば、ほら、こんだけの大きさの木の枠を、釘かネジで外から固定すればいいんよ」

一人の女子が近寄って来る気配に、アツシは姿勢をより一層低くして、隠れた。しばらくしてその女子が窓から離れたようで、アツシがほっと一安心した直後、マサオが誰かに手招きしているのが目の隅に止まった。

「コイツメ」

二人だけでは怖いばかりで楽しくないと思ったのか、別の男子を呼んだのだ。そいつが近づいてきた時、更衣室の中から、壁越しにくぐもった音で、メロディが鳴り響いた。アツシとマサオは、顔を見合わせて、近づいていく男子の方を一斉に振り向いた。彼の手には、スマホが握られている。一人の女子が窓に走り寄って顔を出した。その瞬間、メロディが更に音量を増した。彼女のスマホから鳴っているのだ。振り向くと、近づこうとしていた三人目の男子は、全力で校舎の方に向かって走り出している。

アツシと彼女の目が合った。体育の授業はニクラス合同なので、アツシの知らない女子だ。鼻は高いわけではないが、スジがスッと通っている。気が強そうな目が驚きに見開かれる。彼女はブレザーへの着替えをすでに終えていた。

「キャ！」

と、その一言で、女子達は理解したらしい。着替えを終えた数人が、猛然とドアから外へと走り出て来た。アツシ達は、女子の着替えを一瞬も見ることなく、あっけなく囚われの身となったのであった。

高校では、いつのころからか、「またともクーポン」と呼ばれるスマホのアプリが流行し始めた。地元の商店街が活性化のために配布しているアプリで、非公式アプリとして、スマホのアプリローダーからではなく、商店街のサイトからダイレクトにダウンロードしたり、SDカードでコピーしてインストールするタイプのものだ。極めてローカルなアプリなので、そういう配布方式は仕方がないのかもしれない。

ともかく、同アプリをインストールしたスマホを持って、商店街のある店舗の近くまで行ったとする。その店舗で、何か特売的なものがあったら、自動的にスマホが反応して、クーポンや特売情報を表示する。アプリにクーポンという名前が付いていても、クーポンという形で割引が提供されるのは稀で、ほとんどの場合特売情報だったが、店舗の近くで表示された特売情報はまさにリアルタイムのものだったので、実際に大きく割引かれた値札が付けられているものばかりだった。

この機能を実現しているのは、GPSによる位置情報とパケット通信ではない。なるべく無線LANだけで済むように実現されているのが特徴だ。店舗からの無線LANの信号を拾うことができるエリアに入ると、スマホにインストールされたまたともクーポンが反応して、特売情報を表示するのだ。この特売情報には文字や画像だけでなく動画さえ含まれていることもがるが、そういったデータを伝送するのも無線LANを用いている。加えて、カスケード式のすれちがい通信という新しいアイデアを導入している。

すれちがい通信とは、天扇堂のDDという携帯型ゲーム機で知られるようになった通信方式で、文字通りDDを持っている人同士がすれちがうと、DDにインストールされているゲーム内のペットや、トレーディングカードなどが、自動的に交換されるという通信である。これは無線LANの特徴を生かした通信方法であり、学校や勤めから帰宅してDDをチェックすると、初めて見るわんちゃんが自分のDDの中に遊びに来ていたり、カードが増えていたりといった楽しみがある。

またともクーポンでは、すれちがい通信を応用して、すれちがった人から、更にすれちがった人へと、特売情報をカスケード式、つまり自然現象で言うと雪崩や滝のように、まるで人と人との接触を通じて拡散するように伝搬することができるのだ。人が集まっている場所に自動的に集中伝搬させることができるという、買い物のために街を歩く人をターゲットにした効率のよい方法だ。またともクーポンのネーミングの由来は、友達のまた友達、またまたその友達まで伝わるからだそうだ。

欠点として、特売情報に動画が含まれていても、実際には画像と文字だけのことも多かったし、店舗で特売情報の伝搬が続けられる有効期限が設定されているものの、その前に売り切れていることも多かった。また、設定する有効期限が長すぎる店舗もあって、その場合には特売開始日時を元に、その特売情報がまだ有効かどうか、見当を付けないといけない場合もあった。

それにも関わらず、たいへんな人気アプリになっていた。店舗側も勤務中の職員全員のスマホにインストールしておくだけで宣伝効果があるのだ。店員が店内を歩き交う店舗であれば、大きな店舗であっても、自動的に店舗の敷地プラス無線LANの届く距離までが特売情報の最小限の配信エリアに含まれる。さらに周囲の店舗でも、同アプリを使っていれば、自動的に特売情報が流れていくのだから、導入した周辺の店舗に声をかけて流行していったのだった。

特売情報の登録は、店舗ごとに専用の登録ソフトを用いてパソコンで行われ、そのパソコンから無

線LANで、店員達のスマホへと最初の伝搬が行われる。パソコンソフトがインターネットへ接続することで、どこかにサーバを介するのだろうか、近隣の店舗の登録ソフトにも特売情報がコピーされるという仕組みだ。このようにして、店舗のパソコンとインターネットを介して、無線LANが届く距離以上に、伝搬距離を伸ばしているのだ。

同アプリの受信メロディは、連鎖的にすれちがいを経た回数が多いほど、また、アップロードから時間が経つほど、小さくなる仕組みになっている。だから、ユーザは、受信メロディが大きな音で鳴ると、一斉にスマホを見て、それが自分が欲しい品物かどうかで一喜一憂するのだ。なにしろ、歩けば届く距離なのだ。品物のカテゴリによって鳴らないようにもできるらしいが、たいていのユーザは設定などしていなかった。

ともかく、同アプリの特売情報をどこかでゲットした男子が、間抜けにも同アプリを無効にせずに覗きに来てしまったお陰で、最も近い距離にいた女子のスマホがその特売情報に反応し、アツシ達は御用となったのであった。

「ごめんなさ〜い」

地面に膝をついて情けない声を上げるアツシ達の前では、ガタイのいい女子が仁王立ちになっている。

「お前たち、これがどういうことか分かってんだろうな？ 下手すりゃ退学もんだぞ。私らがお前が着替え姿をアップロードしたって主張すりゃあな。どう思う？ いい考えだろ？」

稲島陽子は、そのモデルを思わせる長身の美麗さに反して、陸上部女子の中でも特に気が荒いヤツとして男子の間でも有名だった。

「それとも、着替えを見たかったっつーことは、お前も見られる立場になってみるか？ 裸は勘弁してやる。教師らに見つかるのもやっかいだから、素早く五周ぐらいパンツだけで校庭走るか？」

彼らが逃げないように周りを囲んでいる女子の何人かからキャハハという笑い声が漏れた。とんでもない罰だった。いっそ、教師達に早く発見してもらった方が、身の安全が保証されそう。となりのマサオを見ると、ナミダ目になっていた。泣きたいのは俺も同じだ。

「でも、さっき、誰かがいーこと言ってたっけな？ ルーバーだっけ？ 風が通るけど外から見えない窓？ あれ、こいつらに作らせるか？」

それを冗談ととった女子からは再度キャハハという笑い声が漏れるが、数人からは拍手が聞こえた。

「お前ら、木工？ できる？」

うんうん、アツシは必死で肯定する。

「ま、できなくても、やってもらうんだけどね」

今度は一斉に笑い声と拍手。満場一致で判決が確定したようだ。

「そこの謎の工学系少女、こっち来なさい」と陽子。すると苦笑いしながらも進み出てきたのは、さっき覗き未遂の現場で目を合わせた女子だった。

「あの、でも、材料はどうする？ ホームセンターで角材とか買ってこないといけないよ？」

すでに、内容が具体化している。

「そんなの、こいつらに持ってこさせりゃいい。それとも、この件、PTAに報告すっぞって脅して校長からカネ巻き上げるか？ 扇風機も窓に寄せてもう一台あったほうがいいだろ？」

ムチャクチャだ。

「ザ、ザ、材料は自分達で買ってきます」

「ヨッシ。いい心がけだ。自分の立場をよくワキマエてんな。パパラッチ八桜《やざくら》君」

別にデジカメで望遠したわけでもないのに、パパラッチが今後、自分のニックネームになるらしい。

「扇風機は今あるものを窓の近くに移せばいいよ」

よかった。工学系少女は稲島よりも常識があるようだ。

「静がそういうなら、了解だ。そっちのスクーパー蒼井君もさぼんなよ。お前ら逃げたら、連帯責任だかな。言葉では言えないよーなことも、やれる女だって、お前ら知ってるだろ？ ま、知らなく

ても体で分からせるだけだけどな」

ある意味、体で分からせるの具体的内容が妙に気になる。

「じゃ、この件はこれに終了。来週のこの時間までに完成させて、私らの目の前で取り付けんだぞ。静、悪いけど、具体的に何やったらいいか説明してやって」

工学系少女はニコッとはにかんだ。

「これ、なかなか大変だよな」

その日の放課後、静は他人ゴトのように客観的な感想を漏らした。ルーバーをスマホで検索して、なんとか高校生の手でも作れそうな大雑把な自作例を探し当てると、同じページをアツシのスマホでも開いて、それを見ながら作業せよというのだった。アツシ達が窓に近づくと、中に誰も入らないようにドアを見張っていなければならないので、それならばと採寸は静がやってくれた。

「でも、稲島って、逃げられないように、よくGPSトラッカーのアプリを仕込むなんて言わなかったよね」

「お、お前、そんなこと考えてたのかよ」

アツシは嘆息した。稲島がいないので、女子に対してタメ口がきけるようになったらしい。

「ま、教室で捕まえればいいだけなんだけどね」

更衣室には窓が二つあるので、ルーバーは二つ作る方がいいはずだったが、まずは外から覗きやすい側の窓用の方を先に作って取り付けるということになった。扇風機を移動させるのも後回しにした方がいいかとも考えたが、アツシ達が更衣室に近づく回数はなるべく減らしたいという女子達の切実な意見のために、一つ目の取り付けの際に、問題なく扇風機を移設できるかやってみようということになった。一回目の取り付けの際に扇風機移設で問題が出たら二回目の取り付けの際に改善できるが、二回目の取り付けで扇風機移設の問題が発覚したら、アツシ達を更衣室に三回目近付けないといけないからだ。

「これだけの作業をやらせといて、そこまで信用されてないのか...」

作業の大変さのために、自分が追求される立場だということも忘れて、アツシは一人悪態をついた。

四苦八苦しつつも、翌日には、やたら枠の太いルーバーがなんとか完成し、昼休みに稲島達の見ている前で、更衣室の外から取り付けを完了した。取り付けと言っても、出来がデキだったので、不具合が出たらすぐに取り外せるようにと、フックに引っ掛けるだけだ。真ん中の通風する部分には、一応空気の流れが確保できたし、目隠しとしても機能するのを確認して、枠が太いと文句を言った稲島も納得したようだった。

次は、更衣室の内側で、扇風機を窓よりに移す段階だった。アツシははじめて入る女子更衣室はドキドキするものだろうと心の中でむっつりした期待をしていたが、散らかった室内を見てしまうと、とてもそんな気になれなかった。

コンセントはもともと扇風機が差し込まれていたものしかなく、出入り口の近くで窓からは部屋の

反対側に位置している。延長コードを天井に張るのは大変なので、静の意見で、天井の中央付近にある使われていない引掛《ひっかけ》シーリングから電源を取るようになった。将来照明周りをリフォームするときのために、予備的に設けられたものかもしれない。引掛シーリングからコンセントへの変換コネクタは、ホームセンターで入手することができた。

踏み台を使って、延長線を足したコードをテープで仮止めしながら天井を引き、なるべく余分の長さが少なくなるように扇風機を窓近くに位置決めする。コードを本固定する前に引掛シーリングのプラグとボディの接続にガタが残っていないか、アツシが力を入れて増し締めしようとした時、音がした。

「バキッ」

見ると天井の板材が引掛シーリングの根本で割れている。引掛シーリングでは、カチッとロックされるまで回しておかないと後になって外れて落ちてきたりするので、力をかけて確認する必要があった。しかし、上を向いたままでは力が入らないため、目を離して力をかけたら、思わず力を入れすぎたのだ。

「あーあ」

見物に来ていた女子からの無責任な声のアツシの耳に痛かった。

直るかどうかわかるために、開きそうなところを探すと、少し色の濃い三十センチ四方の部分がある。掃除用のモップでつつくと、上に持ち上がった。

「？」

何か白いコードが垂れてきている。近くには何の電気器具もないので、引掛シーリングへ電源を供給している配線しかないはずだが、交流電源のコードはこんなに細くて、固定せずに配線していいものなのだろうか？ よく見えるように踏み台の位置を直してから、再び上り、そっと摘んで引っ張ってみると、ズリッ、と奥から何かが引っ張られて滑る音がする。重みと音からして、ポリ袋に入った何かが、コードの一方の先にくくられていて、もう一方の先は固定してあるようだ。そんなに重いものではないらしい。

更に引き出すと、透明のポリ袋に入って出てきたのは、スマホだった。袋には他にACアダプタが入っていて、スマホとケーブルで接続され、外から白いコードで電源が供給されていた。

「こ、こ、これは、、、盗撮か?!」

稲島が大きな声を上げた。

「盗撮じゃないんじゃない？ カメラは更衣室の中は覗いてないわけだから。むしろ――盗聴?!」

静は分析してみるが、彼女もあまり冷静とは言えない。

「これもお前らの仕業じゃネーよな？」

稲島はアツシを睨んでくるが、もちろん身に覚えなどない。

「知ってたらわざわざ発覚するような真似するかよ！」

言い返すが、先日の覗きも含めて、コトが大きくなって明るみに出てしまいそうな気配に動揺している。

「これって、いつから盗聴してたってこと？ 天井裏で電源をとって、前々からやってるってことだよな？ 一日二日なら、スマホのバッテリーだけで保つはずだから」と静。

「とにかく、しかけたヤツが誰かって、スマホの登録見れば分かるはずだよな？ ロックされてなきゃけど」

「ロックはされているわ。暗証番号だから、適当に入力してたまたま一致しそうにないよ」

「じゃ、やっぱり、先生方のお世話になるとするっか？ 八桜達には悪いけど、報告しないとイケないみたいだ」

「そんな～」

コトの重大性が上がったので、仕方がないことだと理解してはいたが、一応、抵抗の意志は示しておいた。それを聞いた稲島が、部屋の隅に皆を手招きしてから、小さな声でニヤッとしながら新しい案を持ち出した。

「それか、その盗聴犯を捕まえてみっか？」

なるほど、盗聴犯に盗聴されないように小声で打ち合わせというわけなのだ。

「だけどどうやって？」

アツシは嫌な予感がして、稲島の考えていることを早めに知りたかった。

「そりゃもちろん、目には目を、歯には歯をって昔から言うだろ？」

やっぱりか。心の中でげんなりした。

「こっちもそいつの動きを盗撮するのさ。逆にね。この更衣室にカメラを仕掛けてな？」

最後は、アツシに色っぽい目をしてみせるが、アツシの方は思わず目をそむけた。また、工作かよ。しかも、ホントの覗き犯の仲間入りだ。

「い、い、稲島は女子だから、仕掛けても罪は軽いだろうけど、俺らはこの学校に居られなくなるかもです……」

情けないと思う余裕もなく、最後は敬語になってしまった。

「大丈夫だよ。お前らはカメラのカバーだけ作ってくれりゃいい。後は私らで取り付ける。それとも、先生どもに君等の覗きを知られてもいいのかな？」

その一言で、アツシにはもう、反論する気力はなかった。

マサオや見物に来ていた他の女子達は、稲島が話をどんどんヤバイ方向にもって行こうとする気配を察して、更衣室からいつの間にかいなくなっていた。盗聴スマホ対策が決まった時には、更衣室にはもう稲島、静、アツシの三人しか残っていない。理由はよく分からなかったが、なぜかアツシはすっかり稲島に気に入られてしまったらしく、もう逃げられる雰囲気ではなかった。

静が組んだ盗聴犯への罠は次のようなものだった。

まずは、アツシのスマホにベイベーモニターのアプリをインストールする。本当は遠隔監視目的のアプリがインストールできればいいのだが、その手のアプリは公式のアプリローダーには掲載されることがない。悪用される危険があるため、審査で弾かれるのだ。どうしても欲しければ、非公式のサイトからダウンロードしてインストールするしかないのだが、安全性は保証されていない。今回静はアツシのスマホをマルウェアのリスクに晒すつもりはないらしかった。その代わりに、低機能だったが、ベイベーモニターのアプリをインストールすることにしたのだ。遠隔監視目的と書けば角が立つが、赤ちゃんに目が届かないところでママが家事や仕事をするためのアプリとなれば、アプリローダーからいろいろなものがインストール可能だった。

インストールしたアプリには、動体検知の機能はなく、音声、つまり、赤ちゃんの鳴き声の大音量に反応して、写真を撮影し、その画像を電子メールで送信する機能が備わっていた。動体検知とは、

カメラでとらえた映像の中に、動く物体があると録画や撮影を開始するという便利な機能だが、今回のアプリには備わっていない。処理が重いので、赤ちゃん向けには音声の方が向いているのだろう。一度音声に反応してトリガーがかかると、十秒おきに写真を撮影し、電子メールで稲島と静に十回送信するよう設定した。

稲島も、さすがに毎夜毎夜アツシのスマホをこの用途に拘束するのは気が引けたようで、数日中に犯人に来させるため、一思案することになった。学校の公式サイトにニュースを掲載している放送部に頼んで、女子更衣室用ルーバーを志《こころざし》高い有志により設置したという記事を掲載してもらった。その中で、扇風機も移設したため電源を天井からとったと記した。犯人は盗聴スマホがバレそうになってないか確認するためか、あるいは、回収するために、誰もいなくなった夜の更衣室に来るはずだ。稲島はマサオや見物に来ていた女子達にも口止めをして、誰も知れぬ盗聴犯にこの罠の話が漏れないようにすることも忘れなかった。

盗撮スマホは百円均一のショップで買ってきた白い救急箱に入れられ、スマホのレンズから外が見えるように穴を開けて、ダイヤル錠をかけて中を見られないようにした。これだと、どこかの運動部の忘れ物のように思われるはずで、勝手に持ち去られたり捨てられることはないはずだ。

確実に大音量に反応してトリガーさせるために、ドアが開けられると床に倒れて音が出るよう、ルーバーを作った際にあまった木材の中で、なるべく長いものを出入り口のドアに立てかけておいた。

「こんなん、引っかかってくれっかなあ」

すっかり人がいなくなった学校で、稲島と静がスマホの設置を終えて更衣室から外に出てきた時、アツシは多少不安になって、そう言ってしまった。

「じゃあ、お前が寝ずの番すっか？」

「いえ、とんでもない、結構です」アツシは素直に辞退した。

「夜中に盗聴魔がやってきても、お前のスマホ使っちゃってっから、呼び出せないのは残念だなあ」

「アハハハハハ」

「ま、写真で誰か判別できたら、証拠写真があるわけだから、夜中にかけてつける必要はないんだけどね」と、静。

「でもよ、現行犯で押さえるってのが、ロマンってもんじゃねえか」

果たして、そううまくいくのだろうか？ そもそも、なんで盗撮じゃなくて盗聴なんだ？ ひょっとしたら、もっと別の目的があるのではないだろうか？

アツシは何か腑に落ちないものを感じて、夜中に目が覚める度に何度も自問したが、その度に、結局、そんな自問自答は意味がないのだと自分を納得させた。

「自分が口を挟む余地などなかった。言われるようにするしかなかったのだ。盗聴スマホを仕掛けたのがおっかない三年生であっても、その姿を盗撮するよう指示を出したのは稲島なのだ」

嫌な予感を振り払うように、スマホの代わりにパソコンにヘッドホンを繋いで聞く音楽の音量を上げて、いつの間にかアツシは眠りに落ちていった。

もしかすると明後日、明々後日になるかもしれないと覚悟していたのだが、翌朝になって稲島からの電子メールがパソコン宛に届いているのを見た時、アツシは前日の嫌な予感を忘れて、スマホが戻ってくることに安堵した。ヘタをすると、自分が盗撮犯に間違われる可能性だってあるのだ。電子メールのヘッダーに記されている受信者欄によると、稲島からの電子メールは、アツシのパソコン宛だけでなく、静のスマホ宛にも送信されていた。

「盗聴魔の写真は押さえた。女性だった。今日お前らの目でも誰か確認してほしい。八桜のスマホは朝、私が回収するので安心しろ。稲島」

「女性だと？」

アツシは稲島からのメールの内容に驚いた。しかも、静とアツシにも確認してほしいと書いてある。いつもの彼女なら、そんな回りくどい方法を取るだろうか？ いや、稲島自身で確認できたら、すぐにでも担任に話すなり、生徒指導に話すなり、行動を起こすのが普通だろう。

では、顔がはっきりとは撮影できなくて、誰か確認できなかったのだろうか？ だったら、アプリから稲島に電子メールが届いた時点で、彼女なら行って取り押さえようとするはずだから、「取り逃がした」と報告してくるのが普通のような気がする。メールが届いた際に、稲島が身動きとれなかったため、取り押さえるのに間に合わなかったのだろうか？ もしそうなら、静にもアツシと同じ内容でメールを送信したのはどういうことだろう？ 静にもアプリからのメールは届くようになっていたのだから、二人ですでに連絡をとりあってもいいはずだ。それにも関わらず、稲島からのメールでは、静に初めて相談するかのような文面ではないか？

次の日の朝、アツシが登校して教室で稲島と目が合った時、稲島はすぐにスマホを手渡してくれたが、それ以上の会話はしようとしなかった。

「昼休みに屋上で」

それだけ言って、目を逸らした。その態度を見て、反射的に反応してしまったアツシは、自分のスマホにメールや着信履歴が届いていないことを慌てて確認して、稲島からのメールや着信を自分が無視してしまったのではないかという心配を打ち消した。そしてすぐに、そのスマホはさっき稲島から返されたのを思い出し、一人で焦ってしまった小心者の自分に呆れてしまった。自分の席に戻った時に、アプリにまだ写真が残っているのではないかと思いついて開いてみようとしたが、すでに稲島がアンインストールしてしまっていた。

稲島が無口なのがアツシのせいでないということは、盗聴犯の正体が問題なのだ。

「これは一体、何なんだろうね？」

昼休み、屋上で三人が集まった際に、静が稲島のスマホの画面を見ながら、最初に言った言葉だった。

画像には、女性の養護教諭の姿が写っていた。保健室や廊下で見かける清潔感のあるフォーマルな

服装とは違って、目立たない黒のウォームアップジャケットに同じ色のスカート付パンツを着ている。一言で言えばジャージ姿だ。少し線の細い感じもする顔立ちに、オーバルの黒縁メガネ。

それにもう一人、紺のジャージを着た小太りの女性。奇妙なことに、養護教諭と違って、完全防備という出で立ちだった。口にはマスクをかけ、目には花粉症の人達がするようなゴーグルをかけている。そのため、誰なのか顔は分からない。手には透明の使い捨てグローブをはめているようだ。

その二人が写真の中で、台車の上の段ボール箱の中から大事そうに持ち上げて、今にも更衣室の床に下ろそうとしているのは、透明のポリ袋に入った加湿器と見える装置だった。市販されているごく標準的なもののようだ。だが、なぜ、加湿器をこの初夏の時期に更衣室に持ち込むのか、理由がさっぱり分からない。それに加えて、紺の女性の完全防備の意味もなぞだ。

「これ、保健室の若井だよな」

稲島が言っているのは、養護教諭として保健室に詰めている、若井郁江《わかいいくえ》のことだ。

「ぼくもそうだと思うよ」アツシも同意する。

「でも、この紺のジャージは誰？ 知らないよね」

稲島が言うと、アツシと静も相槌を打った。更衣室のドアから入ったばかりの台車の上には、段ボール箱の他にも脚立やバール、金槌といった工具が載せられている。やはり、例の盗聴スマホと関係して、天井裏で作業をするための機材のように思われる。

「どうする？ 若井のヤツをとっちめて吐かせるか？」

稲島が屋上の手すりですり足で長身の背中を反らせながら訊いた。アツシには、稲島がまた何か思い切った行動をとるための準備運動用のように思えた。静も同じように感じたらしく、やんわりと指摘する。

「でも、これってやばくないかな？ スマホ以上になんか、天井裏に持ち込んだって感じだよな？ 加湿器も天井裏ってことなのかな？」

静も自分と同じように稲島を抑えるつもりらしいと知って安堵したアツシは、思わず余計なことを言ってしまう。

「単純に、若井がレズで、盗聴魔っていう線はないみたいだな」

言ってから、稲島も静も黙ったままだったので、二人にとっても、自分が言った冗談が冗談としてとられない雰囲気なのだ気付いた。しかし、今更半分冗談のつもりなのだと言うのは躊躇われて、アツシもスマホ上の写真に目をやって黙りこんでしまった。

「あーもう、捕まえて吐かせりゃ済むんだよ」

稲島がじれったそうに結論に飛びつこうとした。

「でも、それより前に昨日のスマホと、この加湿器が天井裏にまだあるってことを確認した方がよくない？ 若井先生と話すのに、憶測で失礼なこと言っちゃまずいでしょ」

静は一見冷静そうな意見を言った。

「俺の覗きのことは、若井先生には話したくないんですけど...」

アツシは相変わらず、保身に走ろうとした。

「あ～あ、分かったよ。若井と話すのは後。先に、更衣室の天井裏を確認する。だけでもう皆が帰っ

た夜まで待たずに放課後すぐに確認して素早く終わらせっぞ。そんでいいな？」

稲島は背中を反らせた姿勢から足を投げ出すような仕草を見せようとしたが、それでは屋上の手すりから体半分乗り出してしまうので、そのまましゃがみこんだ。一瞬アツシの方に白と黒のチェック柄のスクールスカートがめくれたが、アツシにはもう稲島の方を見る元気はなかった。

放課後、アツシが踏み台を取りに行っている間に、稲島と静は先に更衣室に到着して、静が更衣室の出入り口で、誰か来ないか見張っている間に、稲島が中に入って昨日から天井に変化がないか確認する。加湿器が天井裏にあるとすれば、一箇所だけ天井に開いている通風口近くだと思われた。アツシが持ってきたのは、高さ六十センチぐらいのアルミ製二段式の踏み台だった。アツシは、少し離れて見張りをすることになった。この踏み台の高さでは、静では天井裏まで手が届かないかもしれないので、静が踏み台を手で押さえながら、稲島が踏み台に乗って通風口に手を伸ばす。体重が重い稲島がバランスをくずしても静が支え切れるかどうか分からなかったが、仕方がなかった。

「お、動くじゃん」

通風口は三十センチ四方の板に格子状に多数の穴が開いているものだったが、稲島が力を入れると簡単に浮き上がった。一段踏み台を降りて、掃除用の使い捨て透明グローブをポケットから取り出して、両手にはめる。ホコリが舞っているはずだが、マスクを使う気はないらしい。

「気を付けてね」

静はそう言うが、稲島の体を手で補助する気はないらしく、あくまで手は踏み台に置いたままである。

「もちよ」

稲島は応じて、再び左足だけ最上段に載せて背伸びし、格子を手でズリズリとずらした後、頭を天井裏に挿入していった。新しい状況を前に、暗いのが怖いとか、バケネズミが天井裏に住んでいるとかいう恐怖は感じてないらしい。

「お、あったあった。スイッチ入ったままだ。...とりあえず写真をば」

自分のスマホをスカートのポケットから取り出して、頭を通風口に突っ込んだまま写真を撮った。

「じゃ、下ろすよ」

「えー！」

「物証があった方が若井と話しやすいんだろ」

「いや、そこまでは.....」

稲島は、そのまま通風口の奥に手を入れて、加湿器のスイッチを切ったようだ。それを引き寄せて、左右に向けてみて、加湿器の後部から出ているはずの電源コードがどうなっているか確認しようとしている。しかし、狭いため、うまく確認できないようだ。焦れたような表情を見せてから、一気にそのまま通風口から出そうとする。途中まで出せば、その先で電源コードのおよその長さが確認できるはずだと踏んだのだ。ある程度長ければ静に加湿器を持たせておいて、稲島が電源コードの接続部を見つけて抜けばよいという考えだろう。静は慌てたが、若井に会うよりも先に加湿器と言い出した立場上、稲島に何か言うのは憚られた。

「八桜君、来て！」

静は稲島を止める代わりに、外で見張っているアツシに向かって張り詰めた声をかけた。アツシは躊躇しながら更衣室の入り口に顔を覗かせたが、稲島の無理な姿勢を見て駆け寄って来た。

稲島が加湿器を水平移動させるために踏み台から右足も一段降りようとする形となり、高さが足りなくなった分を腕と指を伸ばして埋め合わせながら、加湿器の底面全面が通風口から見えるようにな

ろうかという時、それは起こった。

加湿器の底面全体がまだほんの僅か現れていない状態で、加湿器が前方向に傾きはじめた。電源コードが思ったよりも短いか、何かに引っ掛かっているのだ。慌てて稲島が加湿器の横に添えようとしていた手を、底面前方に移して支えようとしたが、今度は加湿器は前方斜め下に傾き……そしてそのままクルリと加湿器上部が下にいる稲島の顔の方を向いた。

「ウプッ」

加湿器に貯えられていた水を顔と上半身に浴びて、稲島が咽んだ。踏み台の一段目にかけていた左足を軸にして、最上段にかけていた右足を床に戻し、落下することは免れたが、顔の下半分から首にかけてびしょ濡れだ。衣服にはあまりかからず、下にいた静も稲島に正対する向きであったため、飛沫しか浴びなかった。

「気持ちワル…」

「タオル取って来るね」

静は荷物置き棚に走り、タオルを持ってきてベンチに腰掛けた稲島の首を拭いた。アツシは駆け寄りつつあった足を掃除用具入れの所まで戻して、雑巾を取って来て、床にこぼれた水を拭こうとしている。

「あとは自分でできる」稲島は不機嫌だった。

「とりあえず戻して、若井のヤツをシメに行くっぞ」

加湿器は電源コードに引っ張られて、通気口の天井近くに吊るされたまま落ちて来ない。天井裏にもう一度押し込み、格子状の通風口蓋を指で引っ掛けて滑らせて、元あった状態に戻した。

もう稲島を止めることはできない。

「これは一体どういうことなんですか？」

稲島は開口一番、若井に盗聴スマホの写真を見せて問い詰めた。

「それがどうかしたのかしら、携帯電話のようだけど」

落ち着き払って若井は答えた。放課後に入った直後の保健室での出来事だ。ベッドには誰も寝ていないことにアツシは安堵した。こんなヤバい話を他の生徒に聞かれてはかなわない。白を基調にした什器類に収められて、機能的ながら美しく整頓された保健室は居心地よく、若井の人気と相まって、同じクラスのふざけた男子達が若井の保健室で仮病を使ってでも休憩したいと言っている気持ちが想像できた。

「先生が女子更衣室を盗聴していた証拠です」

「アハハ、私にそんな趣味はないわ。なんでそれが私が仕掛けたことになってるのかしら」

若井はまだいくらかデスクの方を向いていたものを、立っている稲島に向かって真っ直ぐに、オフィスチェアに座り直した。養護教諭と言っても白衣を着ているわけではない。代わりに、ベージュよりは白に近いアイボリーの映えるジャケットとスカートのスーツが、彼女の細い体躯によく似合っている。オーバルの黒縁メガネが、線が細い印象があるが鼻筋の通った顔立ちに馴染んでいるが、今は少し神経質で意地悪そうに見えるのは、アツシ達が若井を問い詰めなくてはならないという状況のせいだろうか。

「それは、先生が同じ天井裏に加湿器みたいなものを夜中に仕掛けたからですよ」

スマホの写真を若井が写っている画像に切り替えた時、若井の表情が一瞬硬くなったように見えたが、すぐに明るい声でにこやかに言った。

「これはただ単に学校の衛生管理研究の仕事で、ユーティリティ室の湿度調整が今年のテーマなのよ。そのために夜だけ更衣室の湿度を上げた状態の実験をしているの」

「なんでそんなことのために、天井裏に加湿器を隠す必要があるんですか?!」

「別に隠してるんじゃないわ。加湿を均一にするために空気の入口に近いところに設置しただけよ。たまたま通風口が理想的な設置位置だっただけのこと。流体力学って聞いたことあるかしら？ 通風口から室内に入ったところで圧力が一気に落ちるから、湿気が均一に広がるのよ」

「じゃ、このもう一人、先生じゃない方の人は誰なんですか？」

「そりゃ、このヤマモトさんという業者の方に作業をお願いしたからじゃない」

さすがの稲島も黙り込んだ。確かに奇妙だが、この場だけの話では、それはそれで筋は通っている。この衛生管理研究の話をも否定するためには、他の先生達に裏をとらなければならない。しかし、それがいいことなのかどうか、稲島だけで判断していいのかどうか、自信がなくなってきたのだ。

「ちょっと来て」

稲島は小声で静とアツシに言うと、保健室の隅に二人の手を引っ張って顔を寄せた。

「八桜達の覗き未遂の話は、先生達の前で話すのよくないよね？」

「もちろん、出さないでくれるってなら、その方がいいけど、ぶっちゃけ、それ、もう無理かもだよ。だけど、話さなくちゃいけない段階になったら、あくまで若井先生達のスマホと覗き未遂は、混同されないように話してくれるって方が、オレ的に重要になってきてるばい」

なぜか他人の身を案じるような言い方で、アツシが自分の立場を説明した。静はアツシのことをつくづく自分の保身の要点をころえたと感じる。しかし、状況を客観的に見つめたいと思うほど、状況が煮詰まっているということか。そこで、残っている中で若井に直接確認した方がいいと思われることを思い浮かべた。

「とりあえず加湿器の中の液体について、確認しといた方がよくない？」

「今更そんなこと言う？ 私、その水浴びちゃったんだぜ」

冗談っぽく稲島が言ったのが、最後の方は自虐ネタっぽく笑い出して少し声が大きくなっていた。

「水を浴びたってほんと?!」

若井が聞こえてしまった話題に割り込んできた。なぜか、まるで助けを求めるような目をやっている。

「...そうですね。でも特に水の腐った匂いもしてなかったし、交換したのは昨日の夜なんですよ？」

加湿器ごと水を交換したというのは、あくまで想像だったが、さっきまでの若井の話で、かなり以前から設置していたことを仄めかされたので、そう尋ねてみた。

「でももしかするともう少し古いかもしれないわ」

若井が何を気にしているのか分からない。

「もし体調がおかしくなったら、保健室に寄ってね。とにかく明日になったら、また詳しいことを教えてあげるわ。今日はもう遅いし帰いなさい」

若井は三人とはもう目を合わせないようにして、立っている三人を押し出すようにして保健室の開き戸に向かわせようとした。その強硬な態度に、稲島が食ってかかる。

「おい、結局、水はなんだってんだ?! 話そこで終わらせるつもりかよッ!」

若井の方も、引き戸の外側に押し出しながら、稲島を真っ直ぐに見据えて答える。

「この写真を撮ったということは、あなた達は女子更衣室の中を盗撮したのよね？ 私達はあくまで研究として湿度の高い夜を選んで加湿器を設置する必要があったのよ？ それに対して、あなた達はどうかしら？ ともかく、明日になれば、もう少し詳しい話をしてあげられるのよ。それまで待つてくれたら、あなた達の盗撮は不問という形にして上げられるのだけれど」

グウの音もなかった。稲島が怯んでいる間に、若井が手を離れた保健室の引き戸は、クローザーが働いて三人の目の前で閉じられた。三人は、目の前に広がった白い表面を前にして、無言のまましばし呆然とした。

次の日の朝、アツシがいくら待てども、稲島は教室に来ないまま、ホームルームが始まってしまった。

「稲島は風邪を引いて今日は休みだが、他にも体調の悪いものはいるか〜」

担任のその言葉で、何となく嫌な予感を感じたアツシは、休み時間に隣のクラスの静に相談することにした。

「稲島さんが風邪を引いて学校を休んだよ」

静はしばらくキョトンとして答えた。

「稲島さんのその...風邪って、やっぱり昨日の加湿器と関係あると思う？」

「かもしれない」

アツシは肯定したが、自信はない。

「何となく、加湿器の水を浴びたって話をした時、若井先生の様子が変わったように思うのよね」

静も確信はないようだったが、二人共気になるということには変わらないようだ。稲島からメールにも応答がないので、放課後に稲島の家を訪れることになった。

稲島の家は二階建てのアパートの中だった。門柱に埋め込まれている玄関ベルを押す。しばらくして、スピーカーから年配の女性の声が返って来た。

「はい、どちら様でしょうか？」

「私達は同じクラスのものですけれども、陽子さんはいらっしゃいますか？」

「あーあ、今日、欠席って、連絡したからね。陽子はあいにく、入院になってしまったのよ」

稲島の母親から聞いた話は、次のようなものだった。

稲島は、今日の午前中に近所の病院を訪れる間にも風邪の症状が重くなり、季節はずれのインフルエンザではないかということで、市内の総合病院に入院となった。その後も症状が重くなり、今は家族が病室の前につきっきりで、重症のインフルエンザとして、隔離されるにまで至ったのだという。当然、静とアツシは面会することができない。

翌日、アツシと静は、ともかく、若井にもう一度会って話を聞こうということになって、昼休み、学校の保健室を訪れたが、若井はいなかった。近くを通りかかった先生に尋ねると、若井は急に一身上の都合で、実家に帰ったのだという。家族が重症とのことで、いつ復帰できるか分からないという話になっているとのこと。

「これってやっぱり、若井、逃げたのかな」

場所を保健室前から人の出入りの少ない図書室前の廊下に移しながら、アツシは思ったことを口にした。静は黙ったまま、歩を進める。図書室前まで辿り着いた時、彼女は思い切ったようにスマホをアツシの前のかざした。

「なんだよ」

アツシは唐突な静の動作に面食らって言った。静は言う。

「読んでみて」

そこには、若井郁恵の名前があった。論文か何か、とにかく学術記事の一ページ、著者名が記されている欄が、スマホ上に拡大表示されているのだ。五名ほどの共著者が並んでいる中の、最初に、若井郁恵の名前があった。

「若井先生について、検索してみたの。若井郁恵という人物が、論文の著者として登場するわ。その中には、湿度管理の研究なんてないけど」

静が言った。しかし、なんだその妙な言い方は。

「『若井郁恵という人物』って、どういう意味？ 若井先生本人が検索にひっかかったんじゃないの？」

「論文の出版年を見てみて」

そう言われてアツシが出版年を探すとヘッダーの部分にそれらしき数字が記されている。

「一九九七」

でも、何か、おかしくないか？ アツシはそう思って、別の数字を探すためにドラッグしようとする、と、静が言った。

「出版年はその数字の通りよ」

そう言われてアツシは、何がおかしいと思ったのかももう一度よく見て考えてみる。

「そう、その数字の通りだとすると、私達の知っている若井先生では若すぎるのよ」

一九九七年とは、今から十七年近く前だ。若井の年齢は、高く見積もっても三十五だろう。ということは、この記事を若井が書いたのだとすると、たった十八の時に書いたのだということになる。

「その記事の時点では若井先生は普通の日本の大学に通っている」

アツシが思いついた疑問を言葉にするよりも先に、静が言った。つまり海外の大学では稀に行なわれるという飛び級で大学に早くに入学したというわけではないということだ。

「記事は他にもあったけど、これが一番新しい記事よ」

右下へとドラッグして表示範囲を左上へと移動すると、記事のタイトルにはこうあった。

「アデノウイルスを用いた膀胱癌の遺伝子治療」

「この若井郁恵と養護の若井が同一人物だっていう根拠はないわけだよ」

アツシはなおも若井が書いたのではないとする立場で反論しようとする。

「そう。でも、これ以外に若井郁恵が書いた医学記事なんてなかった。だから、若井先生が研究をしているという話が嘘だったか、若井先生の年齢が見た目よりもずっと老いているか、あるいはその両方よ」

静はそう宣言すると、黙ってしまった。

「あるいは、若井先生がやっているのが若返りの研究ならつじつまがあうかも」

アツシはそんなことを思ったが、それは静の真面目な調査に水を差すだけだと思ったので、口には

出さなかった。

盗聴スマホをもう一度二人で点検したが、やはりロックがかかっている中身を見ることはできない。念のため、電源をオフにしてから、再度オンにしても、結果は同じだった。他に分かったことと言えば、SIMカードと本体をどのような組み合わせにしようと、暗証番号が要求されるということだけだった。

アツシのクラスの朝のホームルームで稲島の危篤が伝えられたのは、次の日だった。

「稲島が危篤なんて、絶対おかしいって」

放課後、アツシは静と図書室前の人の少ない廊下で合流し、開口一番すごんだ。

「だからってどうするのよ?!」

静はとり乱した。

「そんな重症のインフルと加湿器が無関係とは思えんだろ」

「じゃ、なんで私たちは無事なのよ？」

「きっと、まだ、発症していないだけだ」

「なんでそんなことが分かるのよ?!」

「なんでなんでって、質問ばかりしてんじゃねえよ」

アツシは珍しくぶっきらぼうな口調になって、それから恥じるように目を逸らした。そして、そのまま意を決したように静の方に、、、目ではなくスマホを向けた。

「ごめん。これが届いたからだよ」

その電子メールには、こうあった。

決して警察や学校に知らせないように。根本的な治療法は私しか知らない。

件名は空のまま。送信者としてフリーメールのアドレスが表示されている。静は自分のスマホを確認する。

「あ、私にも届いてる。でも、送り主が若井先生って保証はないよね」

静はアツシがこのメールを見た時よりも遥かに冷静だった。

「だけど、他にこんなメールを送られる覚えはない」

「じゃ、どうして、私たちは発症してないの？」

「だから、まだ、いわゆる、その、潜伏期なんだよ」

「それはおかしいわ。だったら、稲島さんも同じように潜伏期のはずじゃない」

「浴びた量が違うだろ。僕は稲島が浴びた後、彼女の側にいただけだ。晴ヶ峰だって、飛沫《しぶき》を浴びただけのはずだ」

「だから、インフルエンザウイルスは被曝量が違っても、発症する時期は同じなのよ」

「.....」

「だから、断じてこれはインフルじゃない」

インフルエンザがウイルスへの被曝量で発症時期が違わないというのは初めて聞いたが、静の説明にアツシが反論する余地はなさそうだった。では、稲島の症状とは一体なんなのだ？ アツシと静もいずれ発症するのだろうか？ あるいは、たまたま稲島だけ重症化する体質だったのか？

「いや、たぶん、真っ先に気にしないといけないのは、そこじゃない」

アツシは、自分が負け惜しみを言おうとしているように聞こえるのではないかと心配したが、静はちゃんと聞いてくれているようだった。

「気にしないといけないのは、若井がインフルか何かウイルス的な実験をしようとしていたとして、何で俺たちを脅してまで状況を悪化させるのかってことだよ。このメールの文面の通りに治療法があるのなら、単に稲島を治療して謝罪すれば、今のところ罪はそこまで重くないわけだろ？ これから稲島が死んじゃったらどうするわけ？ もしも俺達三人全員が死んだら、どう考えても、無期懲役だろ？」

「あるいは……言っていない想像かどうか、分からないけど、若井先生は、私達二人も発症して、いずれ三人とも死ぬから、それまでの時間稼ぎをしたいのかも。発症してしまえば高熱で意識朦朧とするわけだから、そんな高校生の言う事と、養護教諭の言うこと、大人たちはどっちを信じると思う？ 私達が加湿器の水、ウイルスか何かによって若井先生が手を下さずとも始末されるのを待って、もう一度学校に戻ってくるつもりなんじゃ…」

静は加湿器の写真を眺めながら思案した後、言った。

「それに、この機種は、昨日調べたら超音波式のものなのね。スチーム式と違って、加熱しないから病原体の散布には向いているみたい。他の女子生徒も僅かかもしれないけど吸い込んでるはずよ。加湿器がいつからあったかは分からないけど、少なくともあの日、朝練したクラブと、体育のあったクラスは」

その続きを、静はあまりにも恐ろしい考えなので口には出さぬまま思った。

「…あるいは、僅かに吸い込んだだけの女子を含めて、いずれ全員が発症するほどの病原体っていう可能性も…ないわけじゃない……」

「この盗聴スマホについては、天井裏にあったという証明自体、もうできないわけか…」

アツシは無念そうに呟いた。

しばらく置いて、意を決したように、静は言った。

「盗聴スマホが、更衣室にあったという証明はできるかも」

「MACアドレスを利用するのよ」

「？」

「全部のネットワーク機器には、互いを識別するための番号がついているの。無線LANの機器を含めてね。そして、無線LAN機器の場合には、そのアドレスを電波信号の形で、常に電波が届く範囲に送信し続けているの」

「なんだかよく分からないけど.....でも、それだけだと、その...盗聴スマホが更衣室にあったときに、近くに別のスマホがあったら、それから、近くに盗聴スマホが存在するということ？ だけだよな？ 分かるのは？ それも、何かそういう特別なアプリをインストールされていた場合のみなんだよね？」

「またともクーポンがそうよね。実際に、八桜君達が更衣室に近づいたことが私のスマホが鳴って分かったんだもの」

静は、図書館の閲覧機の隣に座ったアツシの方に向いて、少し身をかがめてから続ける。  
「いろいろと条件があるんだけど、スマホの何割りかは、近くにある無線LAN機器から受信したMACアドレスを、GPSの位置情報といっしょに地図サービスのプロバイダーに送信し続けているの」

「えー?!」

「条件があるって言ったのはね、一番重要なのは、そういう地図サービス、文献やニュースでは位置情報サービスと呼んでいるらしいんだけど、だからつまり...位置情報サービスのためのMACアドレス情報を収集するシステムが、スマホのプラットフォーム、つまりオーエスとか基本システムとかいうレベルで組み込まれてるってことなの。スマホを購入した直後の初期設定時に、GPSに関する項目があるんだけど、GPS機能の精度向上のためにスマホからプラットフォームメーカーにGPS情報を送信するか尋ねられて、それにイエスと答えたスマホが、情報提供者ってことなの。イエスと答えたら、それ以降、周りの無線LAN機器のMACアドレスとGPSの位置情報が、定期的にプラットフォームメーカーにアップロードされるってこと」

「...そんな、設定、あったか？」

「スマホを買った直後の設定だから、ほとんどの人が分からないままイエスと答えていると言われてるわ」

「そんなに情報を集めてどうすんの？」

「バッテリー消費を大きくしているGPS機能をオフにしても、カーナビができるでしょ。あくまで無線LAN機器が豊富にある市街地に限定されるけど」

「で、盗聴スマホのMACアドレスで位置情報検索をして、更衣室が表示されれば、盗聴スマホが更衣室近くに長く存在したってことになるの？」

「どのぐらいの頻度で更新されるかは一定じゃないので、すぐにとりかかんないといけないんだけどね」

「でも、そんなに簡単に位置検索ができるのって、まずくない？ それこそストーリーカー対策的に」

「だから、今では、なるべく近接した二つのMACアドレスのペアで検索しないと、位置が表示されな

い対策をとってるみたい。つまり、一台一台別の人間が持って移動するという使い方のスマホは検索しにくいって仕組みなの」

「それで、そこまで言うからには、もうクリアしたってことだよね？」

「そう。物理準備室に渋谷先生が設置しているアクセスポイントを使って位置検索に成功したの。画面も一応撮影しといた」

これで、一応、盗聴スマホについては、それが更衣室に長く存在したことは証明できることになる。学校や警察に説明する際に、静とアツシの話を裏付けるだろう。

稲島の訃報が伝えられたのは、次の日だった。

「何でそんな...」

静は、稲島の死を担任が告げた時に、最初は頭の芯が熱くなるのを感じた。

「皆さんに非常に残念なことを伝えなくてはならなくなりました。一組の稲島陽子さんが、ウイルス性と思われる肺炎のため、昨日遅くに病院で息を引き取られました」

親しくしていた女子達が息を呑む気配があってから、一斉に悲しみとうわさ話の声でホームルームはごった返した。しかし、クラスの皆が稲島の死をどう思おうと、静にはもうどうでもよかった。

「次は私なのだろうか.....」

悲しいと思ったけれども、それよりも恐怖の方が優っているのかもしれない。あんなに力強かった稲島が、あんな加湿器の液体を浴びただけで、たった三日で死んでしまったのだ。静は稲島程は液体に接触していないが、濡れた稲島の体を拭いた分、アツシよりは接触したはずだ。では、自分が接触した量は稲島の何パーセントで、アツシの何倍なのだろうか？

そんな冷静な判断をしようとする不謹慎な自分があるのだが、もう一人の自分は一刻も早くこの学校を去れと告げていた。更衣室からなるべく遠ざかり、なるべく大きな病院、そう、稲島が入院した市の病院か、大学病院で検査してもらうのだ。若井が指示してきた、警察や学校に話すなどということにもすぐには矛盾しない。というか、もはや若井が治療法を知っていると言ったことは、ほとんど意味がないことが稲島の死によって証明されたではないか。

静は周囲の目も気にすることなく、ホームルームが終わるのを待たずに席を立ち、隣のクラスへ向かおうとした。その時、廊下に出てすぐのところにアツシがもう立っていることに驚いた。しかし、静を陰しい目でまっすぐに見つめるアツシに、自分と同じように感じたのだと思った。

「八桜君、行こう」

アツシは無言で頷いて、静の手をとった。

「学校に話しても無駄だ。事件が学校の外で起こっているなら、教師達はそれなりに動いてくれるかもしれないけど、問題が学校の養護教諭によって更衣室の盗聴だの、実験だのって話になると、どうせ職員会議を開いて、教師達の間で責任の範囲が決まるまで放置されることになる。病原体と認められていない段階だと、若井の行為よりも、俺たちがやった若井の盗撮の方を執拗に問題視するヤツがないとも限らない。俺たちにはもう時間がないかもしれないのに」

そのまま、もはや校舎から誰に見られていようとも気にすることなく、二人で校門を出たところで、アツシの後に続こうとしたその足を静は止めた。

「どうした？」

二人の手が離れて、駆け足に近いぐらいの勢いだったアツシが歩を遅くして、怪訝そうに振り返る。

「そっちは稲島さんが入院した病院じゃないよね？」

静は、単純に思ったことを口にただけだが、アツシはさっきまでの陰しい表情に、不快そうな気

配を重ねて答えた。

「先に警察に行くだろ？」

予想もしなかったアツシの答に、静はぽかんと口を開けた。

「早く行こう。若井に先を越されたら、俺達、誰にやられたのか伝えられずに死ぬかもしれないんだぞ」

「そんな、稲島さんが入院した病院で私達も検査を受ける方が先でしょ?!」

「その病院で稲島は死んだんだぞ?! 検査しても原因が分かんなかったから死ぬことになったんだろ？」

「八桜君は分かってない。私達二人に、稲島さんに共通の病原体を見つければ、原因が分かるかもしれないじゃない?!」

「普通、病院よりも警察の方が先だろう! 自分がちょっと詳しいからって、大きな口叩きすぎダロツ、晴ヶ峰は！」

思いもかけず激しいやりとりとなったことに動揺しつつも、静は一步も引かなかった。頭の奥の方の冷めた部分で、機械のように正確な計算が働く自分が悲しかった。ここは、考え方が違うことをうまく利用するしかない。友人が死んでも、打算に溺れる自分が惨めだった。自分の決断に戦慄を感じながらも次のように言い切った。

「二人、別々に警察と病院に行きましょう...。それぞれ病院と警察に着くまでのリスクはあるけど、二人同時に若井から妨害が入るとは思えないから、それが一番確実だわ」

「...検査も、警察への説明も、同時に進められるしってか.....」

アツシはあからさまに顔を顰めた。だが、すぐにアツシは表情を真摯なものに変えて、静の考えに同意した。

「それで行こう。だけど、二人ともが病院か警察署に着くまで、携帯の通話はつなぎっぱなしで」

ああ、そんな簡単な手があったか。静は、現金にも、アツシのことを絶賛した。さっき病原体のリスクを理解せず、病院より警察を優先しようとしたアツシを心の中で軽蔑したにも関わらず。

なんて恥知らずなのだ?! 自分は。

思いながら、静は、アツシに深く頷いて、電話帳からアツシの番号を選び、かける。アツシはスマホの画面も見ずに受話ボタンを押して、二人は通話状態になった。

「必ずまた後で」

空中を伝わったアツシの声と、電気信号として伝わったアツシの声が静の耳でハモった。

静は、川沿いにある市立病院への道を急いだ。市街から少し外れたところにあって距離はおよそ二キロメートル。徒歩で行くのに近い距離ではなかったが、徒歩で通学しているため静は学校からは自転車がない。

片側一車線の土手の上の道路からは、左側に、河原を造成して作った公園をぶらりぶらりと犬を散歩させるお年寄りの姿が見える。たぶん男性だと思うが、近づいてみると女性の場合もあったので、性別には自信がない。空は曇っていて、時刻も午前九時なのでまだそれほど暑くない。いつもの光景だが、今日だけは、一瞬、そのお年寄りの姿を注視してしまう。この人に助けを求めたら、助けてくれるだろうか？ それとも、こんな人まで若井先生の仲間などということがありうるだろうか？

「病院が見えてきた」

静の声にアツシが答える。

「こっちはまだ警察署は見えて来ない」

そう言えば八桜君の方も徒歩だった。スマホを持つ手が痛くなってきたので、スピーカーフォンに切り替えた。

「何？」

左手に持ったスマホのスピーカーからアツシが尋ねる。手を振りながら歩いているので、一瞬スピーカーの向きが静の背後に向いて「あに？」と聞こえてしまったが、すぐに意味を理解した。彼の方にもスピーカーフォンにした影響が出ていて、たぶんスマホを振る雑音が入っているのだ。

「ごめん、スピーカーに出した」

「了解」

車の通りは午前中だから少ないと思っていたのだが、実際には予想よりも多く通っている。片側一車線の道路に、歩道なしで路肩が少し広いだけの土手の上の道路は、一台々々が静の横を通る度に、ひどく心細かった。

川は、今まで思っていたよりもずっと川幅が大きく、百メートル以上はあるだろうか。左手に見える対岸にもこちら側と同じように土手の上に道路があるが、こちら側が片側一車線、両側で二車線あるのに対して、対岸は単なる一車線、つまり中央線がない一車線だ。普通乗用車はなんとかすれ違えることができるが、大型車はできない。そんな二つの岸の間に片側一車線の鉄骨でできた古い橋がかかっていて、両端にある交差点には信号機が設けられている。そのため、対岸からこちら岸へ向かう車で対岸は恒常的に信号待ちの列ができていて、静が目指している病院の敷地は、こちら岸の交差点に面している。

対岸で静と同じ向きに進みながら信号を待っている五台ほどの車の列の最後尾に、車数台分の距離を開けて、不自然に停車している車がある。信号のペースに合わせて前進するのが面倒なのかと思っただが、更に一台分、前の車から引き離されても、進もうとしない。白かシルバーのハッチバック車だ。静の側から見える運転席側の窓には、男女の別は分からないが、サングラスをかけた人物が座っている。その人物がチラッと静の方を向いた。

最初は偶然なのかと思ったが気になるので、しばらくその車を見ながら歩いたところ、向かいから来ている車にピッとクラクションを鳴らされて驚いた。普段なら腹を立てるところだが、今はそれど

ころではない。視線を戻すと、対岸の車の人物は再びこちらをチラッと見た。さっきのクラクションで歩みが遅くなったのが、対岸の人物の拳動を気にしているうちに、足が竦むような気がしてほとんど停止してしまった。そうすると、車の人物はチラッと見るどころか、こちらにジッと顔を向けている。

「見られてるかも」

アツシに告げると、静は私立病院の入り口に向かって駆け出した。一瞬顔を左に向けて見ると、静の視界は駆けるに伴って揺れているが、その中で白いハッチバック車が橋に向かって発進したのが分かった。それを見て確信に変わった。間違いない。監視されている！！

「若井に?!」

少し遅れて、アツシからの声が届く。病院までの詳しい距離は分からないが、まだ数百メートルぐらいはある。しかし、対岸は信号待ちなのだから、車では静に追いつけないはずだ。この一帯は公立病院の立地となっているように緑が多く住宅やビルは少ない。駆け込めるような場所は多くないが、確実なのは病院内に入ってしまうと安全ということだ。そうでなくとも、入り口から見える距離になればおそらく警備員や患者などの人目に届く。

対岸の車の人物は、車を降りて走りだす。前方に進んでも信号待ちの列によって進めなくなるため、足で静を追うことにしたのだろう。それにしたって、橋一本分向こうの方が距離があるのだから、静が病院の入り口に着くまでに、向こうはおよそ倍の距離を走らなければならないことになる。追いつけるわけがなかった。静は一気に病院の入り口に辿り着くことにした。

スマホからアツシの音がする。

「一旦切って、警察に電話する。かけ直す」

「待って、切らないで！」

目の前では、もう人影は対岸の交差点から橋の上に移動していた。人影がどんなに速かろうと、追いつけるとは到底思えなかったが、人影はペースを落とすことなくどんどん橋の上をこちらに近づいてくる。

それに対して静の方は、最初、距離の目算を間違ったのかと思った。人影が橋の真ん中ぐらいに達したと見える時点で、静は息が踊り始め、顔を上げ気味にしないと呼吸が苦しい。アツシの音が聞こえるが、もはや両手を振り回している状況では、何を言われているのか聞き取れない。

病院の入り口まで五十メートルほどに迫る間に、もう人影は橋を渡り終えようとしている。こんなことはありえないと頭の中で考えようとするが、すでにパニック状態だ。静の方は息が上がって最初のペースを維持できなくなっているのに、今はグレーのスーツ姿の女性と分かる人影は、最初のペースのままどんどん距離を詰めてくる。

ついには、橋のこちら側の交差点を回りこみ、静の方に向かってくる。息が乱れ完全にペースの落ちた静にとって、それは恐ろしい勢いに思われた。走る向きを変えて、少しでも逃げようとするが、人の目がありそうな場所はやはり病院以外になく、病院に近いほど林が多い状況だ。林の中へ入り込んだ静に、左側からグレーのジャケットとパンツのスーツにサングラスをかけた女性がみるみる近づき、静が左手に固く握っていたスマホに手をかけて静の手から引き抜いた。その勢いで静は茂みに倒れ込んでしまった。女は更に静の右手を両手で掴み、背中側に肘を裏返す勢いで引き付けた。肘に

痛みが走り、静が動かないことを確認すると女は、左手を静の右腕から外し、取り上げたばかりのスマホに言った。

「警察には行くなと行ったでしょう」

それは若井の声だった。その口調に、まったく息が上がっていないことに静は驚いた。自分はもう声など出せないというのに。目算が間違っていなければ、同じ時間で静の倍近い距離を走ったはずであるのに。

「おいっ、晴ヶ峰」

スピーカーからアツシの声が聞こえる。静には耳鳴りがしてうまく聞き取れないが、若井と会話が発立しているようだ。

「晴ヶ峰さんなら無事よ。通報しないこと」

「そんな話信用できるか?! 稲島を死なせたくせに! 晴ヶ峰を出せ!」

激したアツシに若井は淡々と答える。

「私だって稲島さんを見殺しにしたいわけじゃなかった。だけど、もう、あなた達が稲島さんと同じ形で発症することはないわ。それより、八桜君が警察に通報しようとするの晴ヶ峰さんの身が危険だって言ってるのよ」

その言葉に、アツシは黙ってしまった。静と若井の腕が接している部分は、お互いの汗で滑ろうとしている。それを抑えこむかのように、さらに若井は右手の力を増した。静が思わず呻くと、アツシにそれが聞こえたようで、言葉があった。

「分かった。警察には行かないし、電話もしない」

声高だがむっつりとした感じのアツシの声が聞こえると、若井は静を拘束する手の力を緩めた。

「何度も言うけれど、稲島さんが亡くなったのは私達の本意じゃないわ。浴びた時点で手遅れだったの。どのくらい重症化するかは、全く予想が立てられなかった」

静とアツシは黙っている。静の息はだんだん穏やかになっているが、若井を怯えたような目で見るとばかりで話そうとしない。その雰囲気を感じたのか、若井が子供を諭すような調子で言った。

「私達がどうやって、あなた達二人が行動を起こしたことを知ったか、八桜君が警察に向かっていることをなぜ知っていたのか、仕掛けを教えてあげるわ。それを見れば、警察を頼ろうとするのはいい選択肢じゃないと分かるでしょうし、私達のやろうとしていることもいづらか分かってもらえるかもしれない」

最初の言葉が威圧的であったのに対して、最後の方の言い方はいづらか願望が混じっているか、あるいは無責任に嘘をついているかのような言い方だった。それだけ言って若井は、手に持った静のスマホに何かを打ち込んだ。

「天井裏にあった携帯の暗証番号よ。入力してみて」

登録画面の姓の欄に、数字の羅列が入力されている。おそらく、通話中に確実に動作してメモ帳的な動作をするアプリとして、若井がよく使うのが電話帳アプリの登録画面なのだろう。

静の目がそこに釘付けになったのを確認して、若井は腕の力を緩めた。そして、静から距離をとりつつ言った。

「警察や病院に行っても、結果が悪くなるだけよ。終わったら私自身で警察に出頭するわ」

静は呆然として若井が橋の方へ去るのを見届けた。全部聞こえているはずのアツシからも言葉は

なかった。

盗聴スマホに若井から伝えられた暗証番号を入力すると、今まで強固に侵入を阻んでいた認証画面はあっけなく姿を消し、スマホのホーム画面が姿を現した。

青と緑で描かれた細い光の線が絡み合う、デフォルトっぽい壁紙の上に、アプリのアイコンが並んでいる。そのうち、左上隅にあるアイコンには、人物がメガフォンを口に当てているシンプルなイラストに、「ま」「た」「と」「も」の大きな文字が二行二列で描かれている。

静はまたともクーポンをタップした。すると、そこに表示されたのは、膨大な数字の羅列だった。静のスマホならここで、商店街からの派手派手しい色使いに、やたら文字が大きかったり白抜きだったりする手作りっぽい印象がする特売広告が表示されるところだ。

Destination Terminal: 5E-2F-7B-76-46-77

Date Time MAC Address Maximal Intensity

2015/06/05 16:45:54 87-13-D9-ED-12-2B 95

2015/06/05 16:43:50 D7-3E-32-A7-B1-B2 65

2015/06/05 16:37:35 57-18-BD-B7-F1-B6 78

2015/06/05 16:27:38 51-F2-7B-7D-6D-CB 4

2015/06/05 16:17:39 5C-E3-85-7C-07-B3 48

2015/06/05 16:14:28 DF-8E-C6-B8-7C-D9 5

2015/06/05 15:57:33 E4-53-17-17-FB-C9 17

2015/06/05 16:55:08 C9-53-E1-87-0A-D2 25

2015/06/05 16:40:37 3E-5C-C4-B9-D9-32 93

「何なの?!」

数字とアルファベットによるリストの右には、スクロールバーがあり、スライダーがごく小さく表示されている。スライダーはスクロールを必要とする範囲が広いほど、小さく表示される。小さくなり過ぎるとドラッグ操作がしにくくなるので、ある程度以上は小さくならない。つまりスライダーが今まで見た中で最小の大きさで表示されるということは、これ以降の部分に、膨大な量のリストが続いているのだ。

「ああ...そういうことか...」

静がこのリストの意味を理解するまで時間がかからなかった。これは、この盗聴スマホが接触した無線LAN機器の接触リストなのだ。日時とMACアドレスに加えて、Maximal Intensityというのはおそらく無線信号の強度だろう。Maximalとは最大という意味で、遮蔽物を無視すれば、各機器がもっとも盗聴スマホに近づいた時点で測定した強度という意味だろう。別の方法で各端末のアンテナ近傍での無線信号の強さ、あるいはスペック的な数値が分かれば、この強度を除算し、必要ならば平方根を取るなりアンテナの種類に応じた演算を加えることで、およその距離が分かるというわけだ。

詳細が表示されないかと上から五行目をタップすると、新しく別のリストが表示された。

Destination Terminal: 5C-E3-85-7C-07-B3

Date Time MAC Address Maximal Intensity

2015/06/05 16:17:39 5E-2F-7B-76-46-77 48

2015/06/05 16:15:38 19-AE-86-6B-D0-9F 56

2015/06/05 16:06:26 B4-52-2B-83-7A-42 25

2015/06/05 16:04:05 C9-4C-9D-9A-D1-38 8

2015/06/05 16:00:24 63-F5-A5-C6-A5-9A 98

2015/06/05 15:57:58 26-8B-28-E2-F8-B0 37

2015/06/05 15:38:54 84-35-15-0A-B2-1C 36

2015/06/05 15:35:05 BE-91-AB-85-4A-28 46

違いが分からず、戻るボタンを使って、何度か元のリストと新しいリストを往復してみる。

「先頭行が...元のリストでは...」

つまり、Destination Terminalが変更されて、先ほどハイライトされてしまった行のMACアドレスをDestination Terminalとしてリストを表示し直したのだ。だから先ほどのリストでDestination TerminalであったMACアドレスが、一番上の行に表示され、両方のMACアドレスが接触した日付、時刻も一致している。

驚くべきことだった。この盗聴スマホから見た接触情報だけでなく、盗聴スマホが接触したある端末が、そのまた接触した端末が、表示されたことになる。

どういう仕組みでこんなことができるのかと、空っぽになった頭で静は考えた後、またともクーポンを通じて特売情報が共有される仕組みに思い至った。特売情報のテキストや画像、動画は、またともクーポンをインストールしたスマホ同士が接触する毎に、コピーされて伝わっていく。そう。接触したスマホから、そのまた接触したスマホへと。

その過程でコピーされて伝わっているのは、実は特売情報だけではなかったのだ。いや、むしろ、こちらの方がまたともクーポンが意図して設計された本来の目的なのかもしれない。またともクーポンでコピーされて伝わっていくのは、特売情報だけでなく、スマホ同士の接触情報だったのだ。いつ、スマホとスマホが接触したのか、各接触でもっとも無線信号の強度が強くなった日時を含めて逐一記録されていたのだ。

だが、果たしてそれだけだろうか？ 盗聴スマホが更衣室にあったことを証明するために、位置情報サービスを使ってMACアドレスから位置情報が検索できたのと同じ原理で、全部のまたともスマホの移動した経路がトラックできるはずだ。

それに加えて、またともクーポンがインストールされていないスマホでさえ、MACアドレスとしてリストに表示されているはずなので、およその位置を割り出せるということになる。またともスマホに比べれば、リストにまたとも以外のスマホが記される頻度は何割かに落ちるはずだが、それでも、ある程度の移動経路は示せるはずだ。

またともクーポンによる監視網という線が正しければ、大掛かりな仕掛けで若井は静達を監視していたことになる。何のためにここまでやったのだろうか？

教室では、午前中の出来事は、静とアツシが稲島の死にショックを受けていっしょに病院に行ったという話になっていた。それ以上は同情のためか、遠巻きにして誰も直接尋ねようとしなかったが、それが有難いことなのか、静には分からなかった。

終わったら出頭する――

若井のその言葉が何が終わると意味しているのか分からなかったが、何かが起こるのは間違いなかった。

それは思いの外早くやって来た。

昼休みになって、ある女性教師が倒れたとの噂が聞こえてきた。

英語を担当していたその教師は、一時間目の授業は普通にこなしたものの、三時間目の授業の間に不意に自主学習を指示した。次の休み時間で職員室に戻る際に、階段を踏み外したので、大事をとって早退したという話だった。四時間目がその教師の担当だったクラスで、他の教師が授業時間の最初だけ来て自主学習を指示したことだった。

昼休み中、静のクラスでは、女子の一人が弁当を食べている途中で吐き気を訴えて、クラスメートに保健室に連れて行かれた。途中、トイレで一度モドしたらしい。保健室に行くと、すでに別のクラスの女子生徒二人が保健室のベッドで休憩していた。一人は意識がはっきりしていたが、もう一人はひどく眠そうで、かろうじて呼びかけに頷いた答えただけだった。養護教諭がいない上に、ベッドの空きもないため、新しく来た女子生徒は職員室に連れて行かれ、結局、教師が付き添って早退させた。

七時間目が終わって掃除の時間、女子トイレに開かない個室があるとのことで、男性用務員が呼ばれて扉が開けられた時、中から便器に突っ伏したまま動かなくなっている女子生徒が発見された。救急車が呼ばれて、それを待っている間に、掃除の途中で彼女を発見した女子達に混じって、近くの場所の掃除を担当していた女子達が、合わせて七、八人ほど集まってきていた。その中の一人が、救急車が到着するまでの約十分の間に、床にへたり込んだと思ったら、寒気を訴えて動かなくなり、救急車が来た際に元々倒れていた女子と共に搬送された。

クラブ活動が始まる頃には、学校中が騒然となり、倒れた生徒がいるクラスの担任が走り回った後、放課後の職員会議で報告されたとのことだった。その間にも、帰りがけの教室で倒れる女子生徒が出て、職員会議の間にクラス委員達が職員室に乗り込む形となり、学校全体は騒然となった。ついには男子生徒の中にも倒れる者が一人二人出た。

窓際、後ろ寄りの静の席の二つ前の男子は背が高く、彼女は黒板を見るのに不便だった。その男子は、掃除の時間に女子トイレで倒れていたのを野次馬根性を出して見に行った。教室の掃除をサボって、連れ立ってトイレの入口近くまで行ったものの、救急車が来るのに合わせてそこからどくように指示され、教室に戻ってきたのだ。

「俺、あんなの初めて見たよ」

彼がそう言うのを、隣の女子が心底不愉快そうにたしなめる。

「女子ばかりが倒れてるからって、不謹慎よ！」

言葉の最後には怯えと戸惑いが混じっている。

「いや、そうじゃなくて、学校に救急車が来ることなんて、俺が入学して以来なかったんだぜ」

自分の発言がまずかったと思っ直しているらしく、言い訳がましく弁解する。

「でも、なんで女子だけなんだろう？ 別に今日、男女を分けて健康診断があったわけないぜ？ しかも、女の先生が一人だけ混じっているのはなんで？ 他に女の先生なんていくらでもいるのに」

確かにそうなのだ。静だって、女子更衣室に加湿器が仕掛けられた事件を知らなければ、その疑問にぶち当たっただろう。だけど、そのことは今は漏らしてはならない。アツシと会ってどうするか決めるまでは、事情を知っていると知られて取り囲まれて質問攻めにされるのは避けたかった。そんなことを思っている矢先、目の前で机にもたれていたその男子に変化が起こった。

机に尻を半分載せるようにしながら、かと言って机に座っているとまでは言われない姿勢で、話をしながら、いつもの如く十代の落ち着かなさ示すように、後ろに回した右手を机の表面についてしならせるようにして、体を揺すっていたのだが、前に揺すった体を後ろへと戻す際に、机の縁から尻がずりずりとずりおち、教室の床に尻餅を突いてしまった。本人も何が起こったのが分からなかったらしく一瞬キョトンとしたが、結果から言うと単に机から尻がずり落ちた状態に変わりがなかった。恥ずかしそうに苦笑いを浮かべようとしながら、右手で突っ張りながら足に力を入れて、しゃがんだ姿勢を取ろうとした。本人は立ち上がるつもりらしかったが、上履きを履いた足先はだらしなく床を滑って、彼の体重を支えることはなかった。

いよいよ何が起こったのか分からないという顔をして、足先を突っ張りながら右手で自分の体を押し、再度しゃがみ込んだ姿勢をとろうとする。しかし、今度は右手の方も彼の体重が移動してくるのに耐えられない様子で、却って寝そべった姿勢になってしまった。口をあぐりと開けた後、「おかしいな」「おかしいな」とでも言うように動かしながら、寝そべった姿勢のまま、どうにか体に力を入れようとして今度は体を左右に揺らしてみるが、やっぱり却って寝そべってしまう。ここに至って、彼の口から一言が漏れた。

「...助けて.....」

その一言で、静はスローモーションの世界から戻ったように、周囲に人が集まってきているのに気付いた。

「キャー！」

周りの女子のその一叫で、我を取り戻した静は、一目散にアツシの教室に向かうべく廊下へ飛び出した。

「異臭がするゾ！！」

どこか遠くで男子が騒ぐ声がある中、静は走った。

廊下に出た途端、目に入ったのは、水色のジャンパーと白いヘルメットだった。

「異臭だゾ！皆さん落ち着いて避難して下さい！」

厚いマスクの下から出る声は、思いの外近くからしていたのだ。男子の声だと思ったのはこの救急

隊員の声だった。教室に向かって呼びかけながら、静と逆向きに廊下を進むその男性隊員と目が合った時、マスクの下にも関わらず何か動揺のようなものが走っているのに気付いたが、彼は目を右下に反らすと、そのまま廊下を小走りに去った。気にはなりつつも、静は、今はとにかくアツシと合流して職員室に辿り着くことだけを考えることにした。男性隊員が去った後に、卵の腐ったような臭いが少しするような気がするが、今はそれに気をとめている場合ではない。

隣のクラスの教室に辿り着いても、アツシは席にいなかった。さっきの救急隊員による呼びかけは逆効果だったようで、避難場所を指示せずに避難せよとだけ言われて、その後の説明無しに走り去られては、大方の生徒はどこに避難すべきか、誰に付いて行けばいいのか、混乱の最中だった。

行き違いになったかとも考えたが、教室は隣り合っているので、その可能性はアツシが遠回りをしない限りないと思えた。だとすれば、静とアツシだけが知っている怪しい加湿器の設置場所、更衣室かもしれない。今回も女子達が先に倒れ始めたことから、更衣室から何かが拡散した可能性が考えられたが、それを確認するために更衣室に近付くのは危険行為だろう。どっちにしろマスクが必要だ。アツシが更衣室に向かうにせよ、このまま校内でアツシを探すにせよ、保健室に行ってマスクを手に入れる必要がある。

静は方向を変えて、職員室や保健室がある南棟に向かって、空中を渡してある二階の渡り廊下を走った。南棟に入ると、社会科教室やコンピュータ室などの特別教室の一带となり、生徒の姿はほとんど見られなくなった。一階にある保健室に向かうため、階段へと手前の角を曲がった時、角から少飛び出したのは、水色のジャンパーだった。いや、正確には、静の方が飛び込んだのだ。救急隊員と正面で衝突するのを避けようと静は右に体を崩したが、相手も同じように右に体をずらし、その結果静の体は男性隊員の体重で跳ね飛ばされた。

廊下に投げ出されながらわけが分からず、回転する視野の中で最後に静が見たのは、さっき教室を出た時すれ違った男性隊員の目だった。その目はさすがのように静を一目見ると、目を伏せて腕を引いた。隊員の手にあった何かの道具から液体が放出され、滴として静の顔に届くと、甘い芳香を感じながら静の意識は沈んでいった。

誰かに肩を掴まれた感じがして、目を開けると、そこは暗い照明しかない場所だった。焦点が合うと、目の前にはクリーム色の下地の上に、四角いカバーで覆われた蛍光灯が点いている。バスか電車の天井をイメージする光景だったが、天井から静の左側へと連なっている側面には、様々な物体が連なっていた。静の頭に最も近い部分には、ガラスでできた直径二十センチはあろうかという瓶が黄色い枠にセットされて左側の壁に設置されている。静の胸の近くには壁面から台が出っ張っていて、ポリウレタンのたくさんついた黒いパネルに黄色の筐体の装置が設置されている。更に腹側に行くと、液晶パネルのついたパソコンみたいだが、画面の下にはレシートの印刷機みたいなものとたくさんの白いコードが出ている装置がある。日常使っているものを極度に専用化されたような奇妙な物体ばかりだったが、天井付近の白いアナログ時計を見た時、静はこれが現実であることを認識した。

はっとして右側に目をやると、白いカーテンが閉じられた小さな窓が横に並んでいる手前に、若井の顔があった。いつものオーバルの黒縁メガネで、サングラス姿ほど威圧的ではない。

ようやく何らかの車両中に拉致された自分の立場に気が付いて見の危険を感じ、体を起こして若井の方に向き直ろうと手足を動かそうとしたが、手の方はかろうじて動くものの、何かに引っ張られる感じがして自由にはならない。足の方は動いているのかいないのかさえ分からないぐらい感覚がない。できたのは、体を少しよじるようにして若井の方に顔を向けることだけだった。

「どうしてこんなことを...」

そう言ったつもりだったが、カラカラに乾いた喉から出たのは掠れ声だった。若井にその言葉が伝わったのかどうか分からなかったが、憐れむような目をした若井は、静の状態に構わず話を始めた。

。

最初から決してこんなつもりではなかったの。

私には二人の息子がいて、弟の方は生後四ヶ月で発症したの。最初はほんの僅かな痙攣からだったわ。ただ、息を止めて、数秒溜めた後、急に手足全体を広げて見せるような動作。最初は、いつの間にかこの子は、いないいないバーツ、って覚えたんだらう、きっと賢い子に育つでしょうなんて、今にしてみれば馬鹿な考えを抱いたもんだった。だけど、それがどんどん頻繁に起こるようになって、一日に十回以上になってようやく何かの病気の症状に違いないって気付いて、近くの小児科を訪れた。だけど、病院に行っている間に限って、生活サイクルが変わって症状って出なくなるものなのよ。小児科の医師には、思い過ぎしだらう、あなたの不安な気持ちにお子さんが反応してるだけかもしれないなんて言われたわ。

私は研究職で、臨床研修を受けてないけれども、大学で医師としての教育は受け、仕事には役に立たないけれども医師免許も持っていた。確かにその痙攣は、言葉で説明する限りは健児のモロー反射に似ていた。そこで、突発的な痙攣の症状を示せない限りは、何もエビデンスがないことにされてしまうと気付いて、自分でビデオ撮影してエビデンスを取ることにしたの。それを持って大学病院の小児科を訪れると、今度は、あんたが息子に合図を送ってんだらうって言われたのよ。それでも大学病院に通い続け、やっと看護師の前で症状が起こるのを偶然見せることができた時点で、ようやく広い

範囲の血液検査を受けられて何らかの代謝性疾患であることが疑われたの。

その間にも、息子は、一日のうちで、発作を起こしてない時間は眠り続けていることが多くなった。起きている時にも、うつろうつろな感じで、周りの様子に反応しなくなっていったの。起きている間にも目の焦点が合わなくなり、鳴き声さえ上げなくなってしまった。ただただ、固まっている...  
と言ってもいいと思うわ。今となってわね。その時には、そんな表現を用いるとALSを疑うようで怖かったけれど、今じゃ、そんな重症度のイメージで比較するのは、間違いだったって分かってる。最終的についた病名、病型未定だったけどミトコンドリア病という全身病の中には、体のあらゆる部分のいろいろな症状が含まれていて、重症度も患者によってまちまちだったんだから。そんな診断の難しさもあって、日本では、ミトコンドリア病の患者のうち、確定診断が出ているのはたった一割と  
言われている。

ようやく両手が感覚が戻ってきた静は、自分の両手が何かできつく縛られているのに気付いた。病院という言葉から、自分がいるこの場所が救急車の中ではないかと思い至った。両手の麻痺が解けて、完全に使えるようになるまでに、どのくらい時間がかかるだろうか？ 分からないまま、静は若井に見えないように両手の指を動かし続ける。

頭を抱えるような姿勢になって、若井は続ける。

当時大学病院で癌の遺伝子治療を研究していた私は 息子のミトコンドリア病も遺伝子治療できるのではないかと考えた。なぜかという、ミトコンドリアも癌と同じように、形態は違うけれども、人間の体の中に取り込まれた、別の生物だからなのよ。しかも、癌の場合は宿主の遺伝子を元にして  
いるけれども、ミトコンドリアの場合は遺伝子そのものがヒトの核遺伝子とは別に存在する、より分離された存在なの。

しかも、ミトコンドリアにはヘテロプラスミーと呼ばれている特徴があるの。ミトコンドリアもヒトと同じようにDNAを持っているんだけど、それはミトコンドリアDNAと呼ばれて、ヒトの本体のDNA、つまり核DNAとは完全に別個に存在している。ミトコンドリアはヒトの細胞当たり数百から数千もいる。そして、一つのミトコンドリア中にミトコンドリアDNAは十コピー程度存在する。その中で、ミトコンドリアDNAは、核DNAほど同じコピーである必要がないの。つまり、ヒトとは別の生物で、それだけたくさん体の中にいるのだから、一個人の中にいろいろなミトコンドリアが混じっていると考えた方がイメージしやすい。そのことを、ヘテロプラスミーと呼んでいるの。

患者の中では変異したミトコンドリアDNAと、正常なミトコンドリアDNAとがヘテロプラスミーの状態  
で混在していて、変異したミトコンドリアDNAが多いほど重症となる。そして、変異したミトコンドリアDNAを選択的に破壊すれば、残った方の健康なミトコンドリアDNAが養分の取り分が増えたバクテリアが増殖するように増え、全体として元のミトコンドリア数まで回復することが知られている。選択的破壊には制限酵素というDNAの配列を識別して切断する酵素を用いることができる。だから、変異したミトコンドリアDNAを破壊するだけで、私の息子を健常児に戻せるはずだった。

ミトコンドリアは母親からしか遺伝しない。つまり、私自身にも、ごく軽度、病気とは呼べないぐらいの重症度で、ミトコンドリア病の要素があるってことになる。だから、息子のミトコンドリア病の遺伝子治療は、私自身の体で試することができるのに気付いたの。絶対に失敗するわけにはいかなかった。

遺伝子治療に資金と設備を提供してくれるスポンサーは、衆議院議員の楠賀谷治実《くすがやなおみ》だった。でも、彼の目的はミトコンドリア病の治療ではなく、新しい優れた日本民族の創生にあったの。

彼が見返りとして要求したのは、日本人の遺伝子改良計画への協力だった。それも、SFなんかで遺伝子改造の例として出てくる人造人間みたいな核DNAの改造ではなく、今、生活している国民のミトコンドリアDNAを、ヘテロプラスミーの特徴を利用して少しずつ入れ替えていくという計画だった。

将来母親となる女子の体に、優れたミトコンドリアDNAの割合を秘密裏に増やしていくというものだった。優れたミトコンドリアDNAというのは、健康なミトコンドリアDNAの間にも、核DNAと同じように個人や民族によって、個性の範囲で違いがあるの。スタミナの優れた人はミトコンドリアDNAに特定の多型を持っている傾向がある。加えて、近年になって寿命にも影響を及ぼす多型も存在することが分かった。

私は自分の息子にウイルスの副作用がどの程度なのか知らなくてはならなかったから、私の体に投与することを提案したの。スタミナ長寿多型は、私の体でミトコンドリアDNAの七割を占めるようになった。しかし、この時点で大きな免疫反応が現れたため、それ以上の投与は中止されたの。免疫反応が現れた時点で、それ以降は二度と同じウイルスは用いることができない。私への投与は満足な結果を残した一方で、息子への投与がその段階ではギャンブルであることを意味していた。

これが今から十年前の話よ。一時的に私はミトコンドリアの欠乏状態を起こしたけれども、すぐに回復して以前よりも健康でスタミナに溢れた体を手に入れた。長生きできるかどうかは分からないけれど、驚いたことに、外見上、私は若返ったわ。あなた達は私のことを三十代だと思っていると思うけれども、実は四十八歳なのよ。

楠賀谷が女子高生に対して、投与するつもりだと私が聞いたのは、私に対する投与が終わった後のことなの。それに加担した私に、責任がないとは言わないけれども、あなたと同じで私も楠賀谷の被害者なのよ。息子への投与に必要な、免疫反応のデータを――息子を人質にとられているような状態よ。それに、万が一重度の免疫反応が起こった場合のための、警戒システムも完成させたわ。

スタミナ長寿多型を、遺伝子治療にベクターとして用いられるウイルスに組み込んで、担体で包んで水溶させ、熱で壊れないよう超音波式の加湿器を用いて、密閉された空間内で、母親となる直前の年齢の女子に、秘密裏に吸入させる。この条件で選ばれた理想の吸入サイトが高校の女子更衣室だったの。被験者となる女子達の動向を監視するために、スマホにあるアプリを極めてローカルに流行らせることに成功した。それがまたともクーポンだったの。

万が一、免疫反応を起こす女子生徒がいれば、入院なり通院なりしていることを、いち早く察知することができる。実際のところ、免疫反応を起こした女子生徒は稲島さんたった一人しかいないわけ

だけど、これは低用量長期投与という管理から外れた、不幸な事故だったから、防ぎようがなかった。

加えて、万が一、ウイルスが変異を起こして我々の予想以上に拡散してしまった場合、病室で隔離した投与ではないから、地域内でどれだけ感染の影響が出るのか、保証がなかった。そのために、投与された女子達が誰とどのぐらいの頻度で接触したか、記録をとることが必要だったの。そのためのまたともクーポンのメッセージの拡散が、ウイルスの拡散のアナロジーとなった。

だけど、今日の出来事で、そんなことはもうどうでもよくなったのよ。

若井は吐き捨てるようにそう言った。その無造作な言い方とは裏腹に、顔の方はまっすぐに静を見つめている。静はその目つきに何をされるのかと心配になり、顔は若井の方を向けたまま、足をピンと伸ばして動くかどうか確認する。

これまで私が女子に対して低用量長期投与してきたのは、スタミナ長寿多型だったけれども、今日、撒布されたのは、それとは全く異なるものよ。ミトコンドリアDNAを選択的に破壊するための、制限酵素なの。スタミナ長寿多型を、いっきにミトコンドリアDNAの多数派に押し上げるために、野生型ミトコンドリアDNAを皆殺しにする。だから、今までにスタミナ長寿多型を取り込んでいない人がこの制限酵素を投与されると、ミトコンドリアDNAが破壊されて、急性のミトコンドリア病を引き起こすことになる。

だからこそ、女子生徒しか立ち入らない場所を選んで投与されたと思うのだけれど、不幸にして、女性教師が一人、生徒用の女子トイレを利用したために、被曝してしまったわ。他にも女子トイレの近くで騒いだ男子もおそらくそうよ。ただし、あなたが捕まってからは、女子トイレが原因ではないかと推測させないために、異臭を放つだけの殺虫剤が撒布された。

楠賀谷は、もともとそのつもりだったのよ。稲島さんが死亡し、活動が知られそうになった時点で、彼は最後の仕上げに取り掛かったの。

外から救急車のハッチが開かれた。素早い身のこなしで入って来たのは、小太りの中年女だった。かつて、若井といっしょに更衣室の通風口に加湿器を取り付けようとしていたヤマモト。

車内の天井照明の下でヤマモトは、若井と並んで静の正面にあるベンチに腰掛けた。黒のビジネススーツだが、どこかラフな感じのある印象。下はスカートではなくパンツだ。白のシャツにネクタイはしていない。

「説得は終わったの？」

「まだ途中よ」

「じゃ、これで一段落ついたわね」

何が一段落ついたのが分からないが、ヤマモトは強引に言った。自分が来たことで例え途中で一段落ついたと言いたいのもかもしれない。若井は黙って俯いた。

「私の名前はまだ言わないわ。晴ヶ峰静さん。全部の話をあなたが納得してくれたら改めて自己紹介するわ。私達の理想は、昨今の日本の低迷を、新しい手段を用いて挽回することにあるの」

ヤマモトは静の敵意のある目を意に介さず話し始めた。

現在の日本では、結婚年齢が上がり、高齢出産が増え、子供の数が減る。そして労働人口が減って産業がすたれ、さらに結婚に臆病になる。これじゃ悪循環よね。私達はこの悪循環の根を、限定的な遺伝子改良の導入によって、乗り切ろうとしているの。高齢出産の直接的なデメリットは何だと思う？ あなたが四十歳で生む子供と、二十歳で生むこ子供の間に何の違いがあるのかしら？ そう、なぜかは説明されないけれども、高齢で生む子供の方が弱く、病気を患いやすく、流産しやすいと言われている。でも、それはなぜなのかしら？ 答えはね、ミトコンドリアの質が違うのよ。

さっき、若井先生から説明を受けたと思うけれども、ミトコンドリアというのは、母親からしか遺伝しない。そして、加齢にともなって、母親のミトコンドリアDNAは損傷を受けたものが増えていく。そして、母親の卵子の中には、数千数万のミトコンドリアDNAが、損傷を受けたものも、受けてないものも混在して取り込まれるの。赤ちゃんを生む前の母親のミトコンドリアDNAの質が高ければ、それだけ丈夫な赤ちゃんが生まれるという仕組みなの。だから、若くして生んだ赤ちゃんは健康に育ち、高齢で出産した赤ちゃんは患いやすくなる。ミトコンドリア病だけじゃなくて、体全体のエネルギー産生や癌に対する抵抗力、全て含めて劣っているの。あなたにも好きな男の子がいるでしょう？ この問題はいずれ、あなたが妊娠した時に直面することなのよ。

だから私達は、健康な赤ちゃんをみんながなるべく平等に生むにはどうすればいいのかを考えた。その結論が、将来お母さんになる高校生の女の子達が持っているミトコンドリアDNAを、安全な方法で良質なものに置き換えるという今回の計画に結びついたので。

勘違いしないで欲しいのだけれど、核DNAの遺伝子改良みたいな危険なものとは、全く違うものな

のよ。ミトコンドリアDNAを体内で常に損傷を受けて、いろんな形に変異したものが体内に加齢と共に蓄積していく。その殆どは病気というほどの影響を単体ではもたらさないけれども、健康なミトコンドリアDNAの数がどんどん減っていくってことなの。逆に考えると、変異したミトコンドリアDNAを取り込んでも、人間の体は急に病気になったりしない。健康なミトコンドリアDNAが減ることで、徐々に老化減少が現れるだけよ。核DNAとして変異したものが取り込まれたら、細胞当たりにもコピーしかないもんだから深刻な影響が出るけれど、ミトコンドリアDNAを取り込んだところで、その影響はとてもマイルドで危険のないものなの。人間のミトコンドリアDNAは常に、加齢にともなって「遺伝子改悪」されていると言ってもいいと思うわ。

こんな風に、マイルドな方法で遺伝子改良された私達の子孫は、スタミナに優れて、よく働きよく遊ぶ活動的な、新しい日本人となるはずだわ。楠賀谷先生のお言葉を借りれば、「スタミナと長寿を兼ね備えた『新日本人の創生』」なの。「国家百年の計」というけれど、この計画によるミトコンドリアDNAの改良を百年続ければ、日本の全ての人口を、新たな日本人にまで進化させることができるのよ。楠賀谷先生の推進する「新日本人創生計画」は、日本が、かつての輝きを取り戻すための国家プロジェクトなの。このぐらいのことをやらないと、日本が将来の世代に残す、GDP費二三〇パーセントという莫大な負債を、解決することは不可能よ。私達は負債を残すと同時に、健康を将来の世代にも残さねばならないの。せめて四〇兆円に登ろうかという医療費を減らすためにもね。

若井先生のお子さんのような、ミトコンドリア病の方々にとっても、今回の健常者に投与して副作用がないことを確認してから、患者の方々に投与するというのは、人道的見地からも意義のあることだと思うわ。人間的観点からも、私達は若井先生には感謝しているの。今まで、免疫の低下した患者に対して投与することに無理があって一向に進まなかった遺伝子治療の研究が、健常者に対して投与できることに意義を発見できて、一気に加速するのよ。世界中にいるミトコンドリア病の患者のうち約七割が、この研究で救われると試算されていることだしね。それを自らの身体を最初に使って、実験に参加して下さった。これほどまでに、母親の愛が深いということも、私達は若井先生から教えていただいたの。

そこまで説明したところで、ヤマモトは若井の方にチラリと目をやった。若井はそれに気付いたのか気付いていないのか、顔を俯けたまま動かない。しばらく二人はそのまま固まっていたが、若井の方が一時停止からビデオを再開するように、ヤマモトと目を合わせないまま左手を座っているベンチの左側に向かわせる。そこにはA4の用紙が入りそうな大きさの白いプラスチックのカゴが置いてあって、若井がその中に手を入れて何かを取り出す。

それは半透明のプラスチックでできた円筒に、ピストンが通った物体。キャップが付いたままの注射器だった。それが目に入った瞬間、静は足をストレッチャーから落として跳ね起きようとするが、そこをヤマモトの太い手が静の腹に伸びて押し返す。静の腹に鈍痛がして息ができなくなり、口から何かを吐き出すような仕草をしてから呻いた。

「オフウツ」

「早くしなさい！ 仕上げさえ終わればこの子はあなたの仲間になるのよ！」

ヤマモトがこれまでになく甲高い声で若井に命令する。若井は渋々という感じで、静の肩に右手を右手を伸ばして押さえにかかると。静の脳裏に、今までの人生であれほど口にしたいと思いながら、できなかった一言が浮かんだ。強い力でストレッチャーに背中を押し戻されながら、絶望の中で一言が漏れた。

「たすけて――」

見ると、若井はヤマモトの右腕を取り、静にしたのと同じように肘を捻ろうとしていた。二人の体の動きで、二人の向こうに見える窓の白いカーテンがめくれ上がる。静は両足を完全に車内の床に落とし、若井のルージュのスマホをベンチの上に見つけて近づこうとするが、手をベンチにつけても縛られているため体を支えられず横倒しに倒れ込んでしまう。それでもなんとかスマホを手にとった。スマホにはロックがかかっていたが、偶然か必然か、若井が盗聴スマホに設定した暗証番号で解除できた。そして電話をかける。

「何をしているの?!」

気配に気付いたヤマモトが静の方に顔を向けた。静は、ストレッチャーとベンチの間の細長い通路に、膝をついてベンチに寄りかかり、スマホを持ったまま少しでも逃げようとする。運転席側のドアに目を向けると、運転席とストレッチャーとの間の壁に固定されて、黒い円筒形の物体が二本立っていた。直径十センチほどで高さは一メートルほど。黒い円筒の天辺付近には、銀色をした圧力ゲージとレギュレータの丸い物体が一つずつ、合わせて二つ縦に並んで付いている。二本の酸素ポンペを固定している留め金は、レバーひとつで開くと思った。

その直感は当たっていて、縛られた両手全体で引くようにして手前側のポンペの留め金を引くと、あっさりと固定は解け、静は運転席側へ逃げながらただ障害物を作るだけのつもりで、力任せに物体をヤマモト達の方へと引き倒した。

ポンペの頭に取り付けてあったレギュレータが、ベンチの角に当たった瞬間、そこから静が考えていた以上の出来事が起こった。

「トバコッ シャー」

ベンチに金属がぶつかる鈍い音が、金属が塑性変形を引き起こす時の音で終わったかと思うと、何かが擦れ合うような高い音が続いた。静がボンベを引き倒した余力で床に倒れ込もうとする目の前を、さっき床に倒れたと思っていた物体が加速しながら通過している。不思議なものを見るように、スローモーションの中で空中を視界から外れているそれを、静は見送った。その直後、間を置いて突然巻き起こった風圧に驚きながら、身の危険を感じて静は目を閉じた。

その低い姿勢と動作が静を救った。

ボンベが加速しながら救急車のフロントガラスへと突っ込んだ反動で、前輪を軸にして後輪が一瞬浮き上がり、後輪が地面に戻るまでのその刹那に、救急車のフロントガラスと、ガレージの壁との間にある五十センチほどの空間にボンベが橋を作った。外から見ると突然空間に出現したかのようなその物体は、フロントガラス一面に、蜘蛛の巣状の亀裂の連鎖を、一瞬にして広げていった。運転席と助手席で、全く同時に膨張を開始した二つのエアバッグが、その光景にオレンジの色を添える。スローモーションで流れる時間の中で、連鎖の中央にある黒色の物体は、直径十センチの穴を作りながら、コンクリートの壁に深々と吸い込まれた。

コンクリート壁の内部より猛烈な勢いで煙が舞い上がり、ボンネットの塗装に当たってパラパラと地面に落ちる。浮き上がっていた後輪が地面に戻って車重で圧縮される頃には、円筒形の物体の慣性エネルギーは、コンクリートブロックが砕け散ることでおおかた吸収された。壁から七十センチほど突き出した物体の先端から、何かが激しく噴射され続けている。その勢いで、黒い円筒は、埋まった位置を軸にして、円錐を描いて運動を始めた。車内に残っている部分が回転することで、フロントガラス全面が粉々に吹き飛んだ。

最終的に、車体の揺り戻しでサスペンションが何往復か伸縮して徐々に落ち着く頃には、そのボンベは、レギュレータの失われた最後部を重みによって斜め下向きにしながら、三十センチほどの深さでコンクリート壁に突き刺さった状態で動きを止め、後は、ただシューっと放出され続ける酸素の音だけが、ガレージの中に響き続けた。

まどろみの中で感じた光が淡い間接照明によるものだと気付いた時、静はベッドの中にいた。布団の生地の感触は硬かったが、それによって自分が守られているのだと感じる。ハッとしてその認識が本当だろうかと目を見開いた時、そこにはアツシの姿があった。心なしかこのところの短気な面影はなく、静をいたわるように見つめている。

そこに父に連絡を取っていた静の母親が病室の外から戻って来て、泣きながら長々とした説教が始まった。結局母親が詰まりながら語った話を総合すると、静が拉致されて閉じ込められていた楠賀谷記念病院の救急車専用ガレージに警察が到着した時には、救急車の中はガラスの破片と血で満ちていた。酸素ボンベがフロントガラスに衝突した時に入ったヒビに、酸素の噴射による回転力が加わることでガラス全面が粉碎され、酸素の風圧が続いたことで更に車内後方へと飛んだらしい。若井のスマホを守るように倒れ込んだ静だけがほぼ無傷で倒れていたとのこと。すでに若井とヤマモトの姿は車内にはなかったが、アツシの証言によって病院内でガラスの破片を抜く手当てを受けていた若井が発見され、続いて若井の証言でヤマモト達病院関係者が逮捕された。

静が拉致された時アツシは、学校から静といっしょに抜け出すために若井を振り切るための自転車を取りに行っていて静と行き違いになった。その後、静を人質にする形で行動を起こさないように促すメールが届いたが、静から若井のスマホを使って助けを求める通話があった時点で警察に通報したとのこと。

若井の自白によってミトコンドリアDNA改良による「新日本人創生計画」が明らかとなったが、国会議員である楠賀谷には任意での事情聴取が行われただけで、秘書のヤマモトだけが被疑者とされている。楠賀谷の弁によると彼の寄付により設立された病院でミトコンドリア病の遺伝子治療の研究は行なっていたが、その副作用の実験を女子生徒を対象として行おうとした形跡があるとすれば、それは息子に投与する前に薬剤の検証を行いたかった若井がヤマモトに協力させて行ったものだろうとのこと。それでも彼は若井の親としての行いを賛嘆するというのだった。

皮肉なことに楠賀谷の呼びかけでミトコンドリア病の遺伝子治療を行うための資金は潤沢となり、軽症例の確定診断の必要性も認識されることとなった。ヤマモトが静に語ったことの一部は真実で、十年以内にミトコンドリア病の七割が完治する可能性が出てきたという。

週刊誌は若井が自らの身体に行った人体実験のことを面白おかしく書き立て、一時的な生命の危機と引き換えの究極の美容整形とさえ呼ぶ声さえあった。テレビの健康番組でとったアンケートによれば、五十代の営業職の女性の数割が、ミトコンドリア遺伝子治療が合法化されたらいくらかかっても受けたいと答えたという。皮膚のたるみを取ってくれるミトコンドリアが喜ぶビタミンQというサプリが一時的にバカ売れしたが、一ヶ月後にはコエンザイムQ10と同じものだと知った消費者から苦情が殺到するというオチが付いて、一連の報道は熱が冷めたように終息した。

非公式アプリとしてのまたともクーポンは完全に排除され、代わりにまたとも通信を用いた公式アプリがオープンソースで登場し、対応エリアを日本の主要都市へ広げようとしている。非公式アプリに対しては使用者の責任を明確化するため、インストールログが表示できるよう改良する旨プレス

リリースがなされた。

学校で倒れた生徒たちと女性教師一人は皆、二週間のうちに回復した。彼らの体のミトコンドリアDNAに、肺などの細胞に限ってスタミナ長寿多型が含まれていることが分かったが、ミトコンドリアDNA検査法の標準化を待たなければ定量的なことは何も言えないとされた。標準化してしまえば同じ精度で結果が出るため、多くの遺伝子検査会社がコスト数分の一で次世代シーケンサーを運用する中国に外注するであろうと危惧されているが、その方が患者の利益になると主張する患者団体の声はまだ小さい。

季節は夏、高校にはインターハイ女子で好成績を収めつつあることを喜ぶ生徒達の姿がある。

## 拡散の影

<http://p.booklog.jp/book/64835>

著者 : sumikakusato

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/sumikakusato/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/64835>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/64835>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社ブクログ